日本國語大辞典

第四巻

編集　日本大辞典刊行会
発行　小学館

日本國語大辞典

第四巻

編集　日本大辞典刊行会
発行　小学館

日本国語大辞典〔縮刷版〕第四巻

昭和四十九年一月十日　日本国語大辞典　第七巻発行©
昭和四十九年三月一日　日本国語大辞典　第八巻発行©
昭和五十五年四月二十日　同　縮刷版第一版第一刷発行©

編集　日本大辞典刊行会
発行者　相賀徹夫
印刷者　小林清

発行所　株式会社　小学館
東京都千代田区一ツ橋二―三―一
電話　製作（二三〇）五三三三
販売（二三〇）五七三九
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八―二〇〇

＊造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan　0581-420004-3068

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版者の権利侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

編集顧問

金田一京助
佐伯梅友
新村出
時枝誠記
西尾実
久松潜一
諸橋轍次
山岸徳平

編集委員

市古貞次
金田一春彦
見坊豪紀
阪倉篤義
中村通夫
西尾光雄
林大
松井栄一
馬淵和夫
三谷栄一
山田巖
吉田精一

（五十音順）

くれ【玖】〔名〕東国で、芝を土付きのまま取って、茅葺(かや)ぶきの屋根などに植えつけたもの。**すぢき**。*東雅一六「門、〈略〉東国之俗に、地上のしばと云ふ草を、土ながら取り起して、屋を葺くを、くれを切るなど云ひて、玖の字を用ひて、くれと読む也」 方言 青森県南部地方117 宮城県仙台416 秋田県鹿角郡156 茨城県稲敷郡(単に芝だけの意で)050(芝塊)の略(大言海)。(2)ッチクレの略(和訓栞)。(3)

くれ【塊】〔名〕かたまり。多く、土の小さいかたまりなどにいう。また、造語要素のように「土くれ」「石くれ」などと熟して用いられる。*歌語・田植草紙=昼哥四番「くれがつきよいかたびらのすそには、よいがとうりよ、五貫にかふたるかたびら、くれがつくともはやせや地しろのかたびら」*有明集〈蒲原有明〉浄妙華「花の都の片成りに成りも果てざる土の塊(クレ)」 方言 ①稲の株を掘り起こしたもの。淡路島660 徳島県805 ②土のかたまり。群馬県勢多郡221 埼玉県秩父242 新潟県中頸城郡下黒川426 長野県更級郡御厨044 岡山741 壱岐934 熊本県南関947 大分県956 国語書和玉

くれ【暗】〔名〕〔動詞「くれる(暗)」の連用形の名詞化〕①物の陰になっていて暗いこと。暗い所。*万葉一四・三三五五「天の原富士の柴山木(こ)の久礼(クレ)の時移りなば逢はずかもあらむ〈東歌・駿河〉」*三国伝記一一・九「是には此程姫君の暗(クレ)に失給ける程に」*和訓栞「くれ〈略〉東国の俗に、木などのかげに、くれといへり」 ②混乱していること。乱れていること。*五代帝王物語「亀山「門、守護の武士ども一人もなく、皆はせむかふ。京中夥(おびただ)しきくれにてぞ有りし」 補注「に」と結合して副詞ともなり、精神的に暗いさまを表わす。→くれに

くれ【榑】■〔名〕①板材。建築材とした板。貢納品、あるいは商品としての規格は、延暦一〇年(七九一)の太政官符には長さ一丈二尺(約三・六㍍)、幅六寸(約一八センチ㍍)、厚さ四寸(約一二センチ㍍)と、「吾妻鏡」は長さ八尺(約二・四㍍)とある。*正倉院文書―天平六年五月一日・造仏所作物帳(大日本古文書一)「買檜久礼(クレ)一千二百八十枚八七百卅枚、各十一文、五百卅枚、各十文」*正倉院文書―天平一一年正月二八日・写経司解(寧楽遺文)「申請材直銭事〈略〉久礼七十枚 直銭一貫五十文 別十五文」*三代格―一八・延暦二〇年六月二二日・太政官符「応=定=榑丈尺事〈略〉公私交易之榑、多有違法」*栄花―音楽「水の面の間もなく筏(いかだ)をさして、多くのくれ、材木を持て運び」*吾妻鏡・建長五年一〇月一一日「和賀江津材木事。近年不法之間。依、難、用=造作、被、定=其寸法、所謂榑長分八尺。若七尺」*日葡辞書「Cure(クレ)〈訳〉ある種の、幅のせまい板」 ②板屋根などをふくのに用いる板。そぎいた。へぎいた。くれき。*米沢本沙石集=五本・七「次の日、『榑(クレ)や召す』と云て、馬に付て来りける。〈略〉弟子の僧共、『かかる御僻事(ひがこと)こそ候はね。昨日の塩売り、此は榑(クレ)売りにて候に』と云へば」*元和本下学集「榑 クレ 日本俗 為=葺=屋之板=」*暦〈壺井栄〉〇「榑(クレ)を充分に乾かせ」 ③丸太を四つ割にして、心材を取り去ったもの。断面は扇形となる。三方三寸、腹二寸四分というように定めている。地方により寸法を若干異にし、また六つ割、八つ割のこともある。 ④丸太を製材して残った物のはえなき、春の板。 ■〔接尾〕板材を数えるのに用いる語。*正倉院文書―天平宝字二年六月二一日・写千巻経所食物用帳(大日本古文書一三)「薪五荷 松一久礼 又薪一荷」 補注 ●①については「正倉院文書」によると、他の材木はすべて長さ、厚さ、広さを記しているにもかかわらず、榑については寸法を記していない。その値段からみると端板(はたいた=長八尺、広さ二尺、厚さ一寸半)の約三分の一で、一車の車載の量は端板の二倍であるから、端板の材積(二・四立方尺)の二分の一ぐらいの材積をもったものとみられる。また、用途は「於葺料」「葺并壁蔀料」とあって、屋根や壁に使っている。これは榑を割って板、あるいは木舞として用いたものと考えられる。しかし、延暦一〇年の「太政官符」や「延喜式」二四・木工寮の「楹榑五十材。各長一丈二尺。広六寸。厚四寸」などによると、一二尺×六寸×四寸で二・八八立方尺となり、「正倉院文書」と全く異なり、疑問が残る。*十巻本和名抄=五「説文云榑〈補各反 久礼 功程式有檜榑相榑壁柱也〉」とあり「壁柱」としているが、古代の建築では間柱(まばしら)はほとんど用いないので「正倉院文書」に書いてある数量からいって、間柱とは認められない。「榑」字は、薄板の意で用いたもので、字の本義によったものではない(東雅)という。 方言 ①やねいた。岐阜県吉城郡536 ②桶をつくる板。鹿児島県973 ③井戸側。千葉県山武郡蓮沼257 転から(大言海)。(2)クレウ(公料)の約という(類聚名物考)。(3)キン(木断)の義(和訓栞)。 発音 今史 平安○○ 〈京ア〉 国語書和名・色葉・名義・十字・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・書言

くれ の 足駄(あしだ) 木片でつくった足駄。粗末な作りの足駄。*宇津保・藤原の君「大臣(おとど)、括(くく)りあげて、くれのあしだはきて、鋳(さひづ)るつきて、布の直垂(ひたたれ)著たち給へり」

くれ の 枕(まくら) 木片で作った枕。丸木の枕。*小大君集「うへとのゐとて、御前に近うさぶらふ人々、あやしきくれの枕を落として出でたるに」

くれ は 桶(おけ)**や の 棚**(たな)**にあり** 人から物をくれと言われたときに、まぜかえしていう憎まれ口。

くれ【暮】〔名〕〔動詞「くれる(暮)」の連用形の名詞化〕①太陽が沈みはじめて暗くなりかけた頃。夕暮れ。*万葉一四・三四〇「日の具礼(グレ)に碓水(うすひ)の山を越ゆる日は夫(せ)なのが袖もさやに振らしつ〈東歌・上野〉」*蜻蛉―上・天暦八年「雨などふりたる日、『くれに来ん』などやありけん」*源氏―葵「明日のくれにまゐらせよ」*太平記二・俊基被誅事「何(いか)なる暮(クレ)にか、無き世の別れと承り候はんずらんと」 ②ある期間の末。終わり。*源氏・薄雲「殿上人など、なべて、ひとつの色に黒みわたりて、物のはえなき、春のくれなり」*平家・灌頂・六道之沙汰「拝礼の春の始より、色々の衣更(ころもがへ)、仏名の年のくれ」*俳諧・曾良書留・入逢(いりあひ)の鐘もきこえず春の暮〈芭蕉〉」 ③特に、年の終わり。年末。歳暮。*俳諧・鷹筑波―四「莚(むしろ)こもたたきてわめく露涙 煤(すす)掃(はく)暮に死んでのけたり〈一能〉」*歌舞伎・籠釣瓶花街酔醒―大切「当年は毎年(いつも)の臘月(クレ)と違ひ上景気で仕合でございます」*真景累ケ淵〈三遊亭円朝〉七「殊には年末(クレ)の事でございますから」 方言 月の末。つきずえ。静岡県島田562 国語書 (1)クロ(黒)の義(日本釈名)。(2)クラ(暗・昏)の義(東雅・言元梯・名言通)。(3)日没のあとをいうことから、クはクラキ、レはカクレか(和句解)。(4)クーウ(得)レの約。クは付止るの義で、クレは付止るところを得るの義(国語本義)。(5)黄昏時の義の「曛」の省音 Ku にラ行音を添えた語(日本語原考=与謝野寛)。 発音 今史 クレー(熊本分布相) 〈倉ア〉 ① 今史 平安●● 〈倉ア〉 ① 国語書名義・和玉・文明・伊京・明応・天正・黒本・書言

くれ 遅(おそ)**し** 春の日がながく、日の暮れるのがおそい。*春の日のながいことにいう。《季・春》*俳諧・もとの水〈暮遅き四谷過けり紙草履〉*俳諧・鳳朗発句集―上・春「暮遅き加茂の川添(かはぞひ)下りけり」

くれ の 秋(あき) 秋の末。秋の終わり。《季・秋》*拾遺・秋・二一四「くれの秋重之が消息して侍りける返事に 暮れてゆく秋のかたみにおく物は我がもとゆひの霜にぞ有りける〈平兼盛〉」*俳諧・蕪村句集・秋「いささかなをいめ乞(こは)れぬ暮の秋」*五百句〈高浜虚子〉大正七年「能すみし面の衰へ暮の秋」

くれ の 鐘(かね) 暮れ六つ(午後六時頃)に寺などでつく鐘。くれあいの鐘。いりあいの鐘。*咄本・聞上手―薦かぶり「おらにもちっと、くれのかね」*歌謡・新大成糸の調二二八・くれのかね「かあいといふてくれのかね、つくづく物を思ひ川」

くれ の 関(せき) 借金などで年の暮れを越えかねるのを関にたとえていう語で、年の暮れ。大みそか。*雑俳・柳多留―八五「暮の関越せぬは丙午に乗り」

くれ の 魂祭(たままつり) 一二月末日に行なう先祖の霊をまつる行事。《季・冬》*俳諧・改正月令博物筌―二月「魂祭 〈略〉田舎には所により今も祭る也。俳には、暮の魂祭とか又は冬の景物結びて季とす」*妻木〈松瀬青々〉冬「火を敲く小家や暮の魂祭」

くれ の 茶(ちゃ)**の湯**(ゆ) 日の暮れ方に催す茶の湯。*随筆・備前老人物語「暮の茶湯といふことあり。会席をつねより早めに食し、酒すぎ、湯呑終らば、膳をこなたよりをし出すほどにして、はやく座をたち露地へ出べし。亭主もその心をしらば、これは忝とて茶請をもち露地へ出べし。〈略〉畢竟燭の出ぬ前に、道具などみて仕廻うがよきとの心もち也」

くれ の 月(つき) ①日暮れどきに空にかかっている月。*俳諧・炭俵―上「となりの裏の遠き井の本・利牛〉くれの月横に負来る古柱〈野坡〉」*俳諧・文政句帖―五年六月「さらし井に魚もものどやや暮の月」 ②二月の異称。

くれ の 夏(なつ) 夏の終わろうとする頃。夏の果て。夏の限り。《季・夏》

くれ の 春(はる) 春の終わり。春の末。晩春。《季・春》*源氏―竹河「つれなくてすぐる月日をかぞへつつ物うらめしきくれの春かな」*俳諧・藤枝集「落汐に鳴戸やめしきくれの春の春〈雑舟〉」*俳諧・蕪村句集・春「返哥なき青女房よくれの春」

くれ の 文(ふみ) 年の暮れに、遊女がなじみ客に出す金の無心の手紙。*雑俳・柳多留―八「くれの文何がどふでもよこせ也」*雑俳・玉柳―四月二四日「くれの文こまったものと封をきり」

くれ の 星(ほし) 方言 金星。宵の明星。青森県中津軽郡017 〈くれぼし〉静岡県017

くれ の 雪(ゆき) 夕暮れに降る雪。暮雪(ぼせつ)。《季・冬》*俳諧・青蘿発句集・冬「暮の雪水にもつもるけしき哉」

くれ の 嫁(よめ) 年の暮れにもらう嫁。とくに、江戸時代、年の暮れの借金整理のため、持参金をあてにしてもらう嫁をいう。*雑俳・柳多留―二七・暮の嫁かけ取斗ほめて行き」*雑俳・柳多留―八二・暮の嫁耳は揃へど目は不足」

くれ 早し 暮れることが早い。冬の日あしが短いことをいう。《季・冬》

くれ【呉】広島県南部の地名。広島湾に面し、江田島、倉橋島と相対する。旧海軍の軍港として知られた。第二次世界大戦後は、工業・港湾都市として発展。明治三五年(一九〇二)市制。

くれ【呉】■中国の春秋時代、江南の地にあった呉(ご)の国。転して、中国をいう。*書紀・応神三七年二月「北野本南北朝期訓)「阿知使主(あちのをむ)・都加使主(とかのおむ)を呉(クレ)に遣(また)す、命(み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことのり)して縫工女(きぬぬひめ)を求(まく)」 二 〈語素〉呉の国、あるいは広く中国から伝来したもの、ないしは伝来したと伝えられるものに冠していう語。「呉織(くれはとり)」「呉楽(くれがく)」「呉竹(くれたけ)」など。 語源説 (1)日本から見て日の没する国、すなわちクレ(暮)の国という意から〔読史百話=喜田貞吉・神代史の新研究=白鳥庫吉〕。(2)文栄の意の朝鮮語クルの転呼〔大言海〕。(3)古く呉国人は朝鮮を経て来朝していたところからカラ(韓)と称せられており、クレはそれが転じた語〔日鮮同祖論=金沢庄三郎〕。(4)コリ(高麗)の転呼〔日本古語大辞典=松岡静雄〕。(5)カラ(高麗)の転語〔愚雑俎〕。(6)異国からクル(来)という意から〔関秘録〕。(7)高麗国の久礼波、久礼志の二人をしるべとして呉国へ行ったという〔応神紀〕の記録から、クレはクレハ(久礼波)、クレシ(久礼志)のクレ〔和訓栞〕。 発音 ❶ は〈倉〉〔ク〕〈今〉〈史〉〈平安〉●◎ 〈奈〉〔ク〕

くれ の 綾(あや) 中国の呉地方から産する綾。また、中国産の綾。*読本=雨月物語=蛇性の婬=此床の上に輝く(きらきら)しき物あり。人々恐る恐るいきて見るに、狛錦(こまにしき)、呉(クレ)の綾(アヤ)、倭文(しづり)、縑(かとり)」

くれ の 楽(がく) ⇨くれがく〔呉楽〕

くれ の 鼓(つづみ) 「くれつづみ〔呉鼓〕」に同じ。

くれ の 舞(まい) 呉楽(くれがく)の舞。*書紀=推古二〇年是歳〔図書寮本訓〕「呉に学びて伎楽舞(クレノまひ)を得たり」

くれ の 真刀(まさひ) 中国から渡来した立派な太刀。*書紀=推古二〇年正月・歌謡「馬ならば 日向(ひむか)の駒 太刀ならば 勾礼能摩差比(クレノマサヒ)」

くれ【呉】姓氏の一つ。 発音〈倉〉〔ク〕

くれ-あやとし【呉文聰】統計学者。東京出身。慶応義塾に学ぶ。内務省、農商務省などで統計事務を担当。東京専門学校、慶応義塾などの教授。のち内閣統計局審査官。著に〔統計詳説〕〔理論統計学〕など。嘉永四~大正七年(一八五一~一九一八)

くれ-けん【呉建】医学者。医博。東京帝国大学卒。ドイツ留学後、九州帝国大学、東京帝国大学の教授。心臓病、神経痛の研究とその治療にあたる。明治一六~昭和一五年(一八八三~一九四〇)

くれ-しゅうぞう【呉秀三】精神病学者。医博。東京出身。東京帝国大学卒。東京帝国大学教授、東京府立巣鴨病院院長となり、日本における精神病学の確立に努力。シーボルトの研究でも知られる。元治二~昭和七年(一八六五~一九三二)

くれ【某】〈代名〉不定称の人称代名詞。「何」という語と並べて用い、名を知らない人、それと定めない人、または名がわかっていてもぼかしていう場合に使う。事物にも使用する。「くれがし」「なにくれ」と熟しても用いられる。*源氏=乙女「今の世にまことしう伝へたる人をさを侍らずなりにたり。なにのみこくれの源氏などかぞへ給ひて」*名語記=五「なにくれ、かくれのくれ。よろづの事也」 語源説 コレ(此)またはカレ(彼)の転〔大言海〕。

ぐれ〈名〉(「ぐりはまぐれはまぐれの略)①まともな道からそれること。また、それた者。*雑俳・伊勢冠付「朝がへりのぐれ・化されさふな麦ばたけ」*歌舞伎・饅雑石尊聴=五立「ほんに娘で気を揉むといへば、おいらが帳場の邪魔をするとぐれだか女の雲助」 ②盗みなどの悪事をはたらくこと。また、その者。*歌舞伎・桜姫東文章=二幕「そして北八、てめえ小盗みを廃せ。ぐれの癖が止まないぞ」*歌舞伎・霜夜鐘十字辻筮=五幕「小遣銭に困る所から明巣を覗って盗みを初め、遂にゃあ悪徒(アレ)の仲間へ這入り」 ③江戸時代、若い女を雲助仲間でいう。*歌舞伎・蝶鶴山崎踊=序幕「『今爰(ここ)へ来た侍ひが云ふを聞けば、若い女を地蔵堂へ、待たせて置いたと云ったが』『そいつは好いぐれだ』」 ④「ぐれやど」の略。*歌舞伎・玉藻前御園公服=四立「オオ、岩蔵が云ふ通り、大臣(おとど)さんのぐれを尋ねる事だ」 ⑤盗人・てきや仲間などの隠語。㋑不良青少年をいう。〔隠語構成様式并其語集〕*党生活者=小林多喜二~三二「その辺一帯を『何々』組の何々といふやうなグレ(不良)が横行してゐた」 ㋺浮浪者をいう。〔隠語輯覧〕(八)物事のくいちがうことをいう。〔特殊語百科辞典〕(九)仕事に精通することをいう。〔隠語輯覧〕 方言 ①無頼漢。ならずもの。徳島県805 ②乞食。愛媛県宇和島836 高知県幡多郡鵜来島844 ③魚、めじな(目仁奈)=三重県山田605 和歌山県679 大阪府泉南郡淡輪026 兵庫県西宮028 高知県845 発音〈倉〉〔ク〕

ぐれ が 来る 食い違いが生じる。予想が狂う。*浄瑠璃・釜淵双級巴=上「どさくさまぎれ夕まぐれ、ぐれの来ぬうちサア来いと、走り女夫が手を引いて」*歌舞伎・幼稚子敵討=三「後日の詮議を思ふて、寸分違はぬ贋物を、跡へ入置たに仍て、今日迄ぐれが来ぬ」*洒落本・傾城懐はなし「みやこんやはだいぶぐれが来たな。竹格子から覗くと違てこういうちゃおかしいがゑてものにはりがあるなア」

ぐれ に なる まともな道からそれる。堕落する。*歌舞伎・曾我梅菊念力弦=三立「銭箱のくすね銭で、屋体見世の買ひ喰ひ〈略〉ぐれにならねえ其うちに、おいらが仲間へ無心に来い」

ぐれ〈名〉浪花節をいう、てきや・露天商人仲間の隠語。〔隠語構成様式并其語集〕

くれ-あい〔…あひ〕【暮合・暮相】〈名〉①日の暮れようとする頃。夕暮れ時。入相(いりあい)。夕方。日暮れ時。*三河物語=一〔八代広忠〕「七つ時分寄(より)行、暮(クレ)相に成ければ、御門之かぎを渡させ給へと云ふ」*歌舞伎・鳴神「それじゃといふて、山道を暮合(クレアヒ)かけて、どふマア行れるものか」*化銀杏=泉鏡花=二「暮合(クレアヒ)ではあるし、亡なった姉さんの幽霊かと思った」 ②「くれあい(暮合)の鐘」の略。*雑俳・智恵くらべ「しんしんと寺中に暮合がひびき」 方言 日没頃。ゆうがた。大分県直入郡959〈くれやい〉伊豆八丈島310 熊本県938〈くれや〉熊本県938 発音〈倉〉〔ク〕

くれ-あい の 鐘(かね) 「くれ(暮の鐘)」に同じ。*仮名草子・恨の介=上「やうやうくれあいの鐘も今やと思ふ時分に」

クレアチン〈名〉(英 creatine) 脊椎動物の筋肉に多く含まれる一種のアミノ酸。多くはクレアチンリン酸の形で存在し、筋肉収縮のためのエネルギー貯蔵の役割をする。 発音〈倉〉〔ク〕

グレアム(Thomas Graham トマス―) イギリスの化学者。研究業績は基礎化学から応用まで多彩であるが、塩類の組成の決定や、また気体の拡散に関する「グレアムの法則」を発見、化学の発展に尽くした。主著〔化学綱要〕など。(一八〇五~六九) 発音〈倉〉〔ク〕

グレアム の 法則(ほうそく) グレアムが発見した法則。①容器中の気体が小穴から流出する速度は、気体の密度の平方根に逆比例し、容器の内外の圧力差の平方根に比例するという法則。 ②①の関係から導かれる、気体および液体の拡散速度は、その分子量の大きいものほど小さくなる傾向がある、という法則。 発音〈倉〉〔ク〕

ぐれ-ある-く〈自カ四〉悪事をしてまわる。*歌舞伎・恋闇鵜飼燎=四幕「道中筋をぐれ歩き、人の難儀になる奴と知れちゃあ助けて置れねえ。打殺すから覚悟しろ」 発音〈倉〉〔ク〕〔ル〕

クレアンテス(Kleanthes) 古代ギリシアの哲学者。アソスの人。師ゼノンのあとを継ぎ、ストア派の学頭となる。意志の力に価値をおいて、あらゆる徳の源泉とした。また哲学を弁証学、修辞学、政治学、倫理学、自然学、神学の六部門に分けた。著作に〔ゼウス讃歌〕。(BC三三一頃~二三二頃) 発音〈倉〉〔ク〕

クレイステネス(Kleisthenes) 紀元前六世紀後半のアテナイの政治家。旧来の四部族制を廃して一〇部族制とし、またオストラキスモスの制度を定めて、アテナイ民主政治の基礎を築いた。クリステネス。生没年不詳。 発音〈倉〉〔ク〕

くれ-いそ-ぐ【暮急】〈自ガ四〉夕方を待ち遠しく思う。また、日没が心あわただしく感じられる。*右京大夫集=いくたびか行きかへるらむ七夕のくれいそぐ間のこころつかひは」 発音〈倉〉〔ク〕〔ゾ〕

くれ-いた【榑板】〈名〉榑縁(くれえん)に用いる板。榑貫(くれぬき)。 発音〈倉〉〔ク〕〔ロ〕

グレイバー〈名〉(英 graver) 彫版用具の一つ。先がとがった鋼鉄の彫刀。主に鋼銅の彫版に用いる。バーリン。 発音〈倉〉〔ク〕〔レ〕

ぐれ-いも〈名〉 方言 植物。①さといも(里芋)。岩手県釜石市平田130 ②つくねいも(捏芋)。宮城県一部024 ③きくいも。宮城県一部024

くれ-いらぬ〔連語〕 方言 動詞の連用形をうけて、それには及ばないという意を示す。「そんなに泣きぐれいらん」「しぐれはいらん(するには及ばない)」熊本県一部951 鹿児島県肝属郡高山979

クレイン(Stephen Crane スチーブン―) アメリカの小説家。代表作〔赤色武勲章〕はアメリカ自然主義文学の先駆的作品。(一八七一~一九〇〇) 発音〈倉〉〔ク〕〔レ〕

くれ-うち【塊打】〈名〉すき起こした田畑の土塊を塊割(くれわり)などでたたいて砕くこと。 方言 ①土のかたまりを打ち砕くこと。埼玉県秩父242 ②土のかたまりを打ち砕く農具。埼玉県秩父242〈くれぶち〉群馬県多野郡240 発音〈倉〉〔ク〕〔チ〕〔レ〕

くれ-うつ-る【暮移】〈自ラ四〉日暮れ時になる。暮れかかる。*風雅=秋上=五〇六「くれうつるまがきの花は見えわかで霧に隔てぬ小牡鹿の声〈藤原為秀〉」

くれ-うり【榑売】〈名〉榑を売ること。また、その人。*米沢本沙石集=五本=七「昨日の昼は塩うり、此は榑クレ)うりにて候に」*随筆・嬉遊笑覧=一上「伊豆の山寺の僧の物かたりに榑売くれや召候とて馬につけて来るあり」

クレー〈名〉(英 clay) ①クレー射撃の標的。石灰とピッチを混ぜて作った円盤状のもの。クレーピジョン。*寝園=横光利一「鳥を真似した素焼のクレーが鳥のように飛び立ち出す。スタンドの射手たちは、夫々自分のそのクレーを散弾で撃ち落すのだ」 ②クレーしゃげき(―射撃)の略。 発音〈倉〉〔ク〕〔レ〕

クレー(Paul Klee パウル―) ドイツの画家。スイスで生まれた。自己の心情に根ざした一種具体的な形象による抽象画を多く描き、ピカソ、マチスとともに二十世紀の巨匠の一人となった。(一八七九~一九四〇) 発音〈倉〉〔ク〕〔レ〕

グレー〈名〉(英 grey ※ gray)(グレイ) 灰色。鼠色。*最上川=村松繁「薄いグレイのスカート着けた素子が来た」*散りゆく花の末に=中山義秀「ダブルボタンのグレーの背広服に」 発音〈倉〉〔ク〕〔ン〕〈今〉〈史〉

グレー (I)(Sir Edward Grey サー=エドワード―) イギリスの政治家。外相。第一次世界大戦前から戦中にかけて、イギリス外交を指導。三国協商を推進し、またドイツのベルギー中立侵犯に対して対独宣戦を行なった。(一八六二~一九三三) (II)(Charles Grey チャールズ―) イギリスの政治家。一八三〇年首相に就任してホイッグ党内閣を組織し、三二年選挙法改正案の成立に成功した。(一七六四~一八四五) (III)(Thomas Gray トマス―) イギリスの詩人。古典的な、格調の高い文体で、憂愁の色濃い詩を残し、ロマン派の先駆者となる。「墓畔の哀歌」は「新体詩抄」に訳出された。(一七一六~七一) 発音〈倉〉〔ク〕

クレーコート『名』(clay court) 表面を粘土または赤土で作ったテニスのコート。 発音〔像ア〕㋐

クレージー『形動』(英crazy) 熱狂的なさま。気違いじみているさま。*あめりか物語〈永井荷風〉市俄古の二日「日本のきものは綺麗ですね。私は日本の事だと云へば夢中(クレーヂー)ですよ」 発音〔像ア〕㋐

クレーしゃげき【―射撃】『名』素焼きの皿、または、石灰とピッチで作った皿を空中に投げ上げたところをねらってライフル銃で射ちくだくスポーツ。クレー。 発音クレーシャゲキ〔像ア〕㋐+

グレーズ『名』(英glaze) 魚を冷凍して保存する際に、乾燥を防ぐために魚体のまわりにつくる氷の被膜。

グレーダー『名』(英grader) 建設機械の一つ。土かき板(ブレード)を備えた地ならし、整地工事用の機械。エンジンをもつ自走式のものと、トラクターに牽引されるものとがある。 発音〔像ア〕㋐

グレート『語素』(英great) 偉大な、すぐれた、または、大きい、などの意を表わす。*若い人〈石坂洋次郎〉上・二二「怒号と悲鳴と煤煙との中にグレート大阪は常に忙はしく動いて居る」

グレード『名』(英grade) 等級。階級。 発音〔像ア〕㋐

グレートソルト-こ【―湖】(グレートソルトは Great Salt) アメリカ合衆国、ユタ州の北部にある塩湖。乾燥地域にあるうえ流出河川がないために塩分の濃度は三〇パーセントに達する。 発音〔像ア〕㋐+²

グレート-デーン『名』(英great dane)《グレートデン》イヌの一品種。デンマーク原産で、マスチフ系とグレーハウンド系との混血種。体は大きく肩高七五センチ以上になる。体色は白に黒のぶち、黒、茶などがある。 発音〔像ア〕㋐

グレートバリアーリーフ (Great Barrier Reef) オーストラリア東北部の沿岸にある世界最大のサンゴ礁。 発音〔像ア〕㋐²

グレートブリテン-とう :タウ【―島】(グレートブリテンは Great Briain) イギリスの主要部分を構成するイギリス諸島の主島。イングランド、ウェールズ、スコットランドに大別される。ヨーロッパ最大の島。 発音グレートブリテントー〔像ア〕㋐

グレート-プレーンズ (Great Plains) 北アメリカ中西部の大平原。大部分が放牧地で、コムギ、トウモロコシの栽培が盛ん。石油、天然ガス、石炭の世界的産地。大平原。 発音〔像ア〕㋐²

グレーハウンド『名』(英gray hound)《グレイハウンド》イヌの一品種。エジプト原産。肩高七〇センチ以ぐらい。やせ型で腰が細く、四肢や首が長い。耳は小さく、後方へ垂れ、尾は細長い。体毛は短く、淡褐色、灰白色、黒白色など。視力と走力にすぐれ、狩猟に用いられる。*社会百面相〈内田魯庵〉犬物語「英吉利(イギリス)の"グレイハウンド"や露西亜(ロシア)『ハウンド』は体格も立派で中々見栄がするが」*寝園〈横光利一〉「すると、鞭のやうにすんなりと撓(たわ)んだ一匹のグレイファンドが、むっくりと庭石の影から起き上った」*愛の渇き〈三島由紀夫〉二「大きなグレイハウンドを連れて滞在してゐた独乙(ドイツ)人の家族がゐた」 発音〔像ア〕㋐

クレープ『名』(フランス crêpe)《クレップ》①布の表面に縮緬(ちりめん)風のしぼある織物の総称。縮(ち)りの強い糸を使って織ったもので、糸の収縮を利用してしぼを出す。縮地綿布。ちぢみ。*牡蠣〈林芙美子〉「周吉が〈略〉クレップの襯衣一つで」 ②「クレープシャツ」の略。 ③「クレープペーパー」の略。 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐

グレープ『名』(英grape) ブドウ。ジュースなどの種類名として用いられることが多い。 発音〔像ア〕㋐

クレープ-シャツ『名』(洋語フランス crêpe+英shirt) 夏用のちぢみの下着のシャツ。クレープ。《季・夏》*地底の歌〈平林たい子〉御用「白い官服に上衣をぬいだクレップシャツで佩剣を外した安直な変装だった」 発音〔像ア〕㋐+ 〔奈ア〕㋐+

グレープ-ジュース『名』(英grape juice) ブドウのジュース。未発酵のブドウのしぼり汁。《季・夏》*若いセールスマンの恋〈舟橋聖一〉一・二「若い女中がグレープ・ジュースを運んできた」*青春怪談〈獅子文六〉汗「あたしは、ハンバーグ・サンドウィッチと、グレープ・ジュースにでも、しようかな」 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐+

クレープ-デ-シン『名』(フランス crêpe de Chine「シナのクレープ」の意) 経(たていと)に生糸、緯(よこいと)に縮(ち)りの強い生糸二本を交互に用いた平織物。婦人服地、裏地に使用。フランス縮緬(ちりめん)。デシン。*友田と松永の話〈谷崎潤一郎〉三「燃えたつやうなクレープ・ド・シーンの緋の服を纏ったキャザリンを」*寝園〈横光利一〉「三角に折った灰色と洗朱の染分けになったクレイプ・デ・シンをくるりと首に巻きつけ」 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐

グレープ-フルーツ『名』(英grape fruits) ミカン科の常緑小高木。西インド諸島のバルバドス島原産で、主としてアメリカ合衆国のフロリダ、カリフォルニアなどで栽培される。果実は径一〇センチ以ぐらいで、果肉は柔らかい。さわやかな風味と苦味があり、生食やジュースに用いる。小枝に三―十余個の果実がつくさまがグレープ(ブドウ)に似ているのでこの名があるといわれる。 発音〔像ア〕㋐

クレープ-ペーパー『名』(英crepe paper) 縮緬(ちりめん)のようなしわを寄せた紙。造花や紙ナプキンなどに用いる。ちりめん紙。クレープ。 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐

クレーム『名』(英claim) ①貿易などの商品取引で、取引の相手が品質不完全、着荷不足、損傷その他の契約違反をした場合、相手方に対して損害賠償の請求や苦情を申し立てること。 ②一般に商品に対する苦情。 ③公的団体の立案に対する他の公的団体からの異議申し立て。 発音〔像ア〕㋐

クレーム『名』(フランス crème)「クリーム」に同じ。*ふらんす物語〈永井荷風〉雲「コロン水、顔へ塗るクレエム、髯剃(ひげそり)の後でつける白粉」*青年〈森鷗外〉二二「咖啡(コオフィイ)にcrèmeクレエム)をつからへたが、クレエムが来たかと思ふと、直ぐに代りを言ひ付けて、べろりと舐(な)めてしまふ」 発音〔像ア〕㋐

クレーラー-ミュラーびじゅつかん :ビジュツクワン【―美術館】(オランダ Rijksmuseum Kröller Müller) オランダ、オッテロールにある美術館。一九三八年創立。ゴッホの作品やクールベ、ドーミエら印象派からキュビスムに至る数多くの近代絵画の収集で知られる。 発音〔像ア〕㋐ 〔ジ〕㋐

クレール(René Clair ルネ―) フランスの映画監督。無声映画時代に前衛映画で出発し、トーキー初期の『巴里の屋根の下』で映像と音声のモンタージュで名声をあげた。作品『巴里祭』「自由を我等に」「リラの門」など。一八九八年生。 発音〔像ア〕㋐

くれえん【―縁】『名』縁板を縁框(えんがまち)に平行に張った縁側。*浮世草子〈好色一代男〉五・四「矢の根をつがひ、榑椽(クレエン)より下に飛下るを」*俳諧〈去来抄〉修行「くれ椽に銀土器(ぎんかはらけ)をうちくだき 身細き太刀の反ることを見よ」*随筆〈嬉遊笑覧〉一上「榑またくれ縁(今はきりめならぬ横板のえんをいふ)などいへる」 方言えんがわ。千葉県山武郡上堺257 島根県邑智郡712《くれん》山形県村山160 群馬県利根郡217 千葉県山武郡010 長野県下水内郡515 発音〔像ア〕㋐ 古辞書 書言

クレーン『名』(英crane)《クレン》荷物を持ち上げて移動させる機械。物体にひっかける鈎や磁石が上下、左右、前後の運動をするのが原則。腕木を上下左右に動かすものや、レールに沿って移動するものなどがある。起重機。*愛弟通信〈国木田独歩〉大連湾占領後の海事通信「鉄材数十間、丁字形をなし、デリックあり、クレンあり、二十二三噸のものは引き揚ぐるを得べし」*艦底〈荒畑寒村〉二「大きなクレーンを据ゑつけた船は」 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐

クレーン『名』(英grain) ヤードーポンド法での重量の単位。一グレーンは約〇・〇六八グラム。ゲレイン。 発音〔像ア〕㋐

クレーン-しゃ【―車】『名』クレーンを取付けた自動車、貨車。土木工事、交通事故などの救援、一般運輸などに用いる。 発音〔像ア〕㋐

クレオソート『名』(英creosote) ブナ属植物の木タールを蒸留して得られる油液。グアヤコール、クレオゾールなど約一〇種のフェノール類の混合物。無色または淡黄色の透明液で、光を強く屈折し、強い刺激性のにおいがある。劇薬。殺菌・消毒・防腐・祛痰(きょたん)・鎮咳剤。胃腸の異常発酵、慢性気管支炎などに用いる。*仰臥漫録〈正岡子規〉一「服薬はクレオソート、昼飯晩飯後各三粒」*青春と泥濘〈火野葦平〉五「薬といってもヨーチンとクレオソートと若干の注射薬があるきりだ」 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐

クレオソート-ゆ【―油】『名』木材防腐剤。コールタールを蒸留して得られる中油以上の留分の混合物。中油、重油、アントラセン油からナフタリン、クレゾール類、アントラセンなどを取りだした残りの油を混合したもので、魚網染料、燃料、塗料などにも用いる。 発音〔像ア〕㋐+

クレオパトラ(Kleopatra) 古代エジプトのプトレマイオス王朝の女王(在位BC五一―三〇年)。カエサル(シーザー)の愛人となり、その援助を受けて王位を回復。のちアントニウスと結婚し、その死を聞いて、毒蛇に胸をかませて死んだといわれる。古来美女の典型として伝承。クレオパトラ七世。(BC六九―三〇) 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐

クレオメネス(Kleomenēs) (Ⅰ)(一世) 古代ギリシアのスパルタの王(在位BC五一九頃―四八七年頃)。アテナイの僭主ヒッピアスの追放を援助。デルフォイの神託によって同僚の王デマラトスを失脚させ、のち発覚して自殺したという。BC四八七年頃没。(Ⅱ)(三世) 古代ギリシアのスパルタの王(在位BC二三五―二一九年)。リュクルゴス制の復帰をはかり、土地分割、負債の帳消し、監督官制の廃止を実行。アカイア同盟と戦い、敗れてエジプトに亡命、自殺した。(BC二六〇頃―二一九) 発音〔像ア〕㋐

クレオン『名』⇨クレヨン

くれ-かえし【塊返】『名』 方言すき起こした田をさらにすきかえすこと。田の第二耕。千葉県君津郡小糸048 宮崎県東諸県郡866《くれげえし》上総埴生郡125《くれがやし》壱岐934

くれ-かえ-す :かへす【塊返】『他サ四』田畑の土を掘り起こす。たがやす。*色葉字類抄「耕 クレカヘス」 古辞書 色葉

くれ-かえり :かへり【暮帰】『名』江戸時代、遊女が昼の勤めを終え、夜見世の準備のため夕方、いったん揚屋から置屋へ帰ること。*浮世草子〈好色盛衰記〉四・五「三浦の格子を立のぞけば、あまた女郎の暮帰(クレカヘ)りの身こしらへいづれか鏡が恥ぬべしと」

くれ-か-る【暮掛】『自サ四(五)』日が暮れようとする。暮れ方になる。*源氏〈若紫〉くれかかりぬれどおこらせ給はずなりぬるにこそは、あめれ」*新古今〈秋上〉三五八「暮れかかるむなしき空の秋をみておぼえずたまる袖の露かな〈藤原良経〉」*俳諧〈ひさご〉「双六の目をのぞくまで暮かかり〈芭蕉〉 仮の持仏にむかふ念仏〈珍碩〉」 発音〔像ア〕㋐ 〔奈ア〕㋐

くれ-がく【呉楽・伎楽】〔名〕古代中国の呉(ご)の国に行なわれたといわれる楽舞で、伎楽(ぎがく)の別称。*書紀-推古二〇年是歳〈岩崎本訓〉呉に学びて伎〈クレ〉学の儛を得たり」*書紀-朱鳥元年四月〈北野本訓〉「新羅の客等に饗たまはむが為に、川原寺の伎楽(クレカク)を筑紫に運べり」*続日本紀-天平勝宝元年一二月丁亥「拝二東大寺一〈略〉作二大唐渤海呉楽一」*令義解-職員・雅楽寮条〈伎楽〉謂呉楽、其腰鼓亦為二呉楽之器一也〉師一人〔発音クレガク〈倉〉〕〔ク〕

くれ-がし【某】〔代名〕不定称。人の名を誰とはっきり指示しないでいう語。だれそれ。なにがし。それがし。くれ。*源氏-夕顔「なにがしくれかしとかずへしは頭中将の随身、その小舎人童をなんしるにいひはべりし」*洒落本・やまあらし「何誰の良人はどふだの、くれがしのだんなはこうだのと」*社会百面相〈内田魯庵〉鉄道国有-一「それがし党の領袖は既に三十万円の手形を握ったといふし、くれがし代議士は一万円で通過賛成の相談が出来たといふし」

くれ-かせぎ【暮稼】〔名〕日の暮れ方に、干し物などを盗む泥棒をいう。盗人仲間の隠語。〔特殊語百科辞典〕

くれ-がた【暮方・晩方】〔名〕①暮れかかるころ。一日の終わり。↔明け方。*宇津保-菊の宴「いまつれなき人たのまるなる。いまくれがたになむ」*蜻蛉-下-天祿三年「日もくれがたになるを、あやしと」*平家-四-厳島御幸「其日の暮方に前右大将宗盛卿をめして」②年、年代、季節などの終わり。*源氏-総角「年のくれかたには、かからぬ所だに、空のけしき、例には似ぬを」*曾我物語-一二-母、二宮ゆきわかれし事「六十のくれがたに、念仏申して、つゐに往生しけるとぞきこえける」〔発音クレガタ〈倉〉〕〔ク〕〔会ク〕〔ク〕

くれ-か-ぬ【暮兼】〔自ナ下二〕暮れそうでなかなか暮れない。春の日あしのながいのにいう。〈季・春〉*俳諧・夜半叟句集「畑打や我家も見へて暮かぬる」

グレガリナ-もく【一目】〔名〕(グレガリナは gregarina) 原生動物門・胞子虫類に属する目の一つ。有頭類・無頭類、分裂族(そく)胞子虫類に分けられる。族虫類。族胞子虫類。〔発音クレガ〈倉〉〕〔ク〕

くれ-き【榑木】〔名〕「くれ(榑)❶」に同じ。*深谷記「神谷彌五郎殿と申仁町へ御出被」成本町一町目御割被」下候。則木曾のくれ木買、わがさいまたで其儘因幡内蔵助へ申候へば」*地方凡例録-二「檜・椹(さわら)は榑木になるものゆへ、入札直段も宜しきものなり」*随筆・嬉遊笑覧-一上「屠龍工随筆に「ひば の甲は木二つに割ればわれたる方平に表の方は丸みの付て琵琶の甲に似たればさもいひたるや。疑らくは今いふ榑木なるべき歟」

くれきなり-むら【榑木成村】〔名〕江戸時代、榑木を本途(ほんと)年貢にかえて納めることを義務づけられた村。信州の伊那谷の榑木成村では全体で六一万挺の榑木を上納した。*熊谷文書-文政一三年「御尋に付奉申上候〈略〉信州御榑木成村々 右弐拾七ケ村惣代 向関村名主与五右衛門 小野川名主清兵衛」

くれき-ねんぐ【榑木年貢】〔名〕山の良木から割り出した榑木を本途(ほんと)年貢のかわりに上納すること。信州の木曾、伊那谷、濃州の裏木曾辺の山村に古くから行なわれた貢木制。木年貢。年貢木。*地方品目解〈尾張藩〉「三ヶ村無下用〈略〉但濃州恵那郡付知・川上・加子母村を三ヶ村と唱へ申候、下用無しと申候は、前々三ヶ村は榑木にて御年貢相勤候に付、下用米と唱へ入用米被下候処、浮役に勤候榑木には下用米不相渡候」

くれき-や【榑木屋】〔名〕榑木を商う店。材木屋。*国花万葉記-七下「くれ木屋。日本橋西かし、鉄炮洲。中橋大工丁。桐の木此所に有 源川」〔発音〈倉〉ク〕〔ク〕

くれき-やま【榑木山】〔名〕榑材を伐り出すための江戸幕府の直轄山林。信州伊那谷にあった。*温田市助氏文書-享保一〇年一一月「四ケ村御榑木山へ御年貢榑入込、割申相定証文」〔発音〈倉〉ク〕〔ク〕

くれ-くぎ【呉釘】〔名〕頭のない釘。切り釘。*正倉院文書-天平宝字五年-造法華寺金堂所解案〈寧楽遺文〉「呉釘七百五十四双直」*新撰字鏡-鍣 无蓋釘也久礼久疑也」*延喜式-三四-木工寮「二寸呉釘料、鐵三分、長功六十隻、中功五十隻、短功四十隻」〔古辞書字鏡〕

くれ-くれ【副】〔「と」を伴って用いることもある〕①目まいがするさまを表わす語。くらくら。*浄瑠璃-十二段-三「どうやらくれくれめまひがくる」②まめまめしく、気軽に働くさまを表わす語。*塩原多助一代記-三遊亭円朝〉一〇「骨身を惜まず、一生懸命にくれくれと働き」

くれ-ぐれ【暮暮】〔名〕日が暮れようとする頃。暮れ方。夕方。*金槐集-秋「萩の花くれぐれまでもありつるが月出で見るになきがはかなさ」*浮世草子-好色五人女-三・一「花見がへりを待暮々(クレグレ)、是ぞかはりたる慰なり」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前・五・三「其日の薄暮(クレグレ)に母親は還(もど)って来たのである」〔方言出雲716 熊本県上益城郡938〕〔発音クレグレ〈倉〉〕〔ク〕〔会ク〕

くれ-くれ【呉呉】〔副〕(「と」を伴って用いることもある)①繰り返し繰り返し行なうさまを表わす語。繰り返しこまごまと。ねんごろに。くれぐれも。*毎月抄「先哲のくれぐれ書きおける物にも、やさしく物あはれによむべき事とぞ見え侍るめる」*御伽草子-三人法師〈古典文庫所収〉「世のうき事をも我身の有様をもくれぐれと書きて上人に参らせける」*人情本・英対暖語-三・一六「私(わちき)と貴君(あなた)と同居(ひとつ)になられる様にするからと、くれぐれ実意を申て呉ますけれども」②他者にはたらきかけるひたすらな気持や行為を表わす語。心をこめて。せつに。よくよく。くれぐれも。下に依頼や懇願などの意思のことばを伴うことが多い。*四座役者目録-下「此書には浅き事深き事有り。呉々秘すべし秘すべし」*花間鶯-末広鉄腸〉一〇「決して素生を明かしてくれるなとクレグレ御頼みでしたから」〔語源説〕繰り繰りの転〔答問雑稿・名言通・俗語考・大言海〕。〔発音クレグレ〈倉〉〕〔ク〕〔会ク〕〔ク〕。〔古辞書書言〕

くれ-ぐれ【暗暗】〔副〕(「くれくれ」とも。多く「と」を伴って用いる)心が暗く沈んで悲しみにくれるさま。思案に暮れるさまを表わす語。*万葉-五・八八八「常知らぬ道の長手(ながて)を久礼久礼(クレクレ)と如何にか行かむ糧米(かりて)は無しに(山上憶良)」*梁塵秘抄-二・四句神歌「花の都を振り捨てて、くれくれ参るは麗けか、且つは権現御覧せよ、青蓮の眼を鮮かに」*日葡辞書「コロログ cureguretoクレグレト)ナル」*歌舞伎・幼稚子敵討-四「心がくれぐれとして、深き所へ沈み入(いる)やうに侍るは」〔発音クレグレ〈倉史〉上代は「くれくれ」と第三拍清音。〔倉〕〔ク〕〔ク〕

ぐれ-ぐれ【副】(「と」を伴って用いることもある)物事の不安定なさま、また、気持がどっちつかずではっきりしないさまを表わす語。ぐらぐら。*雑俳・湯たらひ「ぐれぐれと居はりのわるいすり鉢じゃ」*浄瑠璃・百合稚高麗軍記-二「ぬかすまい不孝者、ぐれぐれとした言訳聞きたくない」*歌舞伎・近江源氏艶講釈-三段「あゝ心がぐれぐれして、深き所へ沈むやうにはんべるなり」

ぐれ-ぐれ【副】〔方言急いで事をなすさま。さっさと。青森県南部地方118 秋田県鹿角郡156〕

くれ-ぐれ-も【呉呉】〔副〕(「くれぐれ」を強めた語)①真心をこめて繰り返し繰り返し。*洒落本・青楼真廓誌「いつ頃又御出なさりますやら御聞申て来てくれろとお二人のおいらんがくれくれもおっしゃりました」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前・六「是非ともお嬢様を当分お貸し下さい、と懇々(クレグレ)も陰で元から頼むだのである」*銀の匙〈中勘助〉前・二五「九つ十にもなってからはそんなところへゆくことの苦痛をくれぐれも訴へたけれど」②過去のことについて、何度思い返してみても。かえすがえすも。*人情本・閑情末摘花-三「此芸を持って門ィ(かどづけ)をせずと〈略〉呉々(クレグレ)も惜い事だ」*いさなとり・幸田露伴-九三「くれぐれも嬉しきものに彼(かの)時の訓戒を記して」*或る女〈有島武郎〉後-二二「くれぐれも憎い女は田川夫人だ」③(下に依頼や懇願の表現を伴って)他者に誠心誠意はたらきかけるさまをいう。㋑相手に直接言う場合。現在では主に手紙の文章で用いる。*今年竹〈里見弴〉焼土-一一「くれぐれもおん身御大切に」*上海〈横光利一〉三〇「あなたにくれぐれもお願ひする わ」㋺人を介して自分の気持を伝えてもらう場合。*思出の記〈徳富蘆花〉四・一六「尚々別紙一通は兼頭様へ其許持参呉れ呉れも御礼申し述べらるべく候」〔発音クレグレモ〈倉〉〕〔ク〕

くれ-げしき【暮景色】〔名〕夕暮れ時のながめ。*浮世草子・好色一代男-七・七「ただぬれつつぞ山水の香ひもふかき菊の節句の暮(クレ)けしき」〔発音クレゲシキ〈倉〉〕〔ク〕

グレコ(El Greco エルー。「ギリシア人」の意。本名はドメニコス=テオトコプーロス)スペインの画家。ギリシア出身。大胆な構図と光沢のある色調による独自の宗教画を描き、ルネサンスとバロックとの橋渡しの役割を果たした。*オルガス伯の埋葬」「聖マウリティウスの殉教」「聖家族」など。(一五四一頃—一六一四)〔発音〈倉〉〕〔ク〕

くれ-こづき【暮古月】〔名〕陰暦一二月の異称。補注「冥伝抄」には「この花の今や咲くらん難波がた くれこの月の頃になりつつ」という例がみられる。〔発音〈倉〉〕〔ク〕

グレコフ(Boris Dmitrievič Grekov ボリス=ドミトリエビチ—)ソ連の歴史家。科学アカデミー歴史研究所所長、最高会議議員などを歴任。ロシア封建制の成立に関する研究で大きな業績を残した。主著「古代ルーシにおける奴隷制と封建制」。(一八八二—一九五三)〔発音〈倉〉〕〔ク〕

グレゴリー(Isabella Augusta Gregory イサベラ=オーガスター)アイルランドの女流劇作家。イェーツの影響を受けて農民を素材にした喜劇を多く書き、アイルランド国民演劇の発展に尽くした。代表作は「噂のひろまり」「月の出」など。(一八五二—一九三二)〔発音〈倉〉〕〔ク〕

グレゴリウス(ラ Gregorius) ローマ教皇の名の一つ。(一)(一世)第六四代ローマ教皇(在位五九〇—六〇四年)。多難な時期に教会を統治して教皇権を確立、自ら「神のしもべのしもべ」と称する。教会聖歌を改修し、「グレゴリオ聖歌」を制定した。主著「イタリアの教父の生涯と奇跡、霊魂不滅に関する対話」など。(五四〇頃—六〇四年)(二)(七世)第一五八代ローマ教皇(在位一〇七三—八五年。教会規律を制定して、教会を世俗権力から解放。教皇権の政治的地位の確立につとめ、ドイツ皇帝ハインリヒ四世を破門した。(一〇二〇頃—八五年)(三)(一三世)第二二九代ローマ教皇(在位一五七二—八五年)。教会内部の改革につとめ、ユリウス暦をグレゴリウス暦に改める。死の直前、日本からの天正遣欧使節を接見した。(一五〇二—八五)〔発音〈倉〉〕〔ク〕

グレゴリオ(ラ Gregorio) ⇒グレゴリウス

グレゴリオレキ-はんしゃぼうえんきょう:ハンシャバウエンキャウ【一式反射望遠鏡】〔名〕反射望遠鏡の一つ。対物鏡の焦点の少し手前に、凹面の補助反射鏡

をおき、その反射光を対物鏡にあけた小穴からのぞくもの。

グレゴリオス (ラテ Gregorios) (一)ギリシアの神学者。東方教会の四大博士の一人。カッパドキアのナチアンツに生まれる。コンスタンチノープルの主教をつとめ、引退後ニカイア信仰の完成に努力。雄弁家として知られ、散文、詩、書簡を残す。(三三〇頃～三九〇頃) (二)ギリシアの神学者。東方教会の教父。聖バシリウスの弟。カッパドキアのニッサの主教をつとめ、コンスタンチノープルの宗教会議では、アリウス派と戦って正統的三位一体論を弁護した。主著「大教理問答書」。(三三二頃～三九五頃) 発音〈慣〉ア

グレゴリオ-せいか 【一聖歌】(ラテ cantus gregorianus の訳語) 聖歌を集大成した教皇グレゴリウス一世の名にちなんだローマ-カトリック教会の伝統的な典礼聖歌。詩篇を主としたラテン語の散文歌詞に曲を付し、八つの教会旋法がそれぞれ曲頭のアラビア数字で示され、音楽理論上、重要な意味をもつ。 発音グレゴリオセイカ〈慣〉ヒ

グレゴリオ-せんぽう ：センポフ【一旋法】〔名〕(グレゴリウス一世が新たに教会旋法に採用したという伝説から) ドーリア、フリギア、リディア、ミクソリディアなど正格の教会旋法に対する、それぞれの変格の旋法の総称。正格旋法の名称に「ヒポ」を付して呼ぶ。 発音グレゴリオセンポー〈慣〉ヒ

グレゴリオ-れき 【一暦】〔名〕一五八二年、ローマ教皇グレゴリウス一三世が制定した太陽暦。西暦年数が四の倍数のときは閏(うるう)年(ただし一〇〇の倍数の年で一〇〇で割った商が四の倍数でないときは閏年としない)とし、他は平年とするもの。日本では明治六年(一八七三)に採用。 発音〈慣〉オ

グレコ-ローマン 〔名〕(Greco-Roman) ①グレコローマン時代の作品や様式をいう。 ②「グレコローマンスタイル」の略。 発音〈慣〉ロ

グレコローマン-じだい 【一時代】 ギリシア美術史の最後の時代。紀元前一四〇年頃から紀元後三〇〇年頃まで、ローマ人の求めに応じてギリシア美術が制作された。特に彫刻が対象にされ、多くは模刻(もこく)。 発音〈慣〉ジ

グレコローマン-スタイル 〔名〕(Greco-Roman style) レスリングの試合方法の一つ。相手の腰から下に手をかけたり、足をからませたりしないで上半身だけで闘うスタイルのレスリング。グレコローマン。 発音〈慣〉ダ

ぐれさんしょう 〔名〕江戸時代に、大坂の人形浄瑠璃社会で使われた隠語のことをいう。せんぼ。〔特殊語百科辞典〕

ぐれし 〔名〕一定の住居がなく、諸方を歩き回って盗みを働く者をいう。盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

クレシェンド 〔名〕⇔クレッシェンド

くれ-しげ 【暗茂】〔名〕木の葉などが繁って下が暗いこと。また、その所。「木(こ)の暗茂(くれしげ)」の形で用いる。

くれ-しづき 【暮新月】〔名〕陰暦正月の異称。《季・新年》*莫伝抄「暮新(クレシ)月 正月 くれし月千世かるらんはつ草の又見るばかり年はこえつつ」*俳諧・改正月令博物笙-正月「異名。陬月、端月、略〉初陽、暮新月(クレシツキ)、新陽、謹月」 語源説 年が暮れて新たに迎えた月の意か〔古今要覧稿〕。 発音〈慣〉ジ

クレジット 〔名〕(英 credit「信用」の意) ①外国の政府や金融機関などから短期、中期の資金を借入れること。また、必要な場合に一定金額の融資を受けることを予約すること。また、その信用。わが国では通常、借款と呼んでいる。 ②掛売りなどの商業上の信用取引。 ③月賦などの信用販売。 ④「クレジットカード」の略。 発音〈慣〉ジ〈奈〉ル

クレジット-カード 〔名〕(英 credit card) カード会社と加盟店が提携して行なう信用販売制度。また、それに用いられるカード。銀行に普通預金のある客はカード会社からカードを渡され、それを持って加盟店に行くと、現金なしで買物などができる。代金はカード使用者の普通預金で決済される。クレジット。 発音〈慣〉ア

グレシャム (Thomas Gresham トマス―) 一六世紀のイギリスの財政家、貿易家。エドワード六世、エリザベス一世につかえ、王室財務官として活躍。有名な「グレシャムの法則」を提唱して、貨幣の改鋳に努力した。(一五一九～七九) 発音〈慣〉ア

グレシャム の 法則 (ほうそく) グレシャムが唱えた「悪貨は良貨を駆逐する」という法則。一国内で、実質価値の異なる貨幣が同一の貨幣価値でともに流通する場合、実質価値のまさる良貨は鋳つぶし、退蔵、国外流出などによって流通面から姿を消す現象をいう。 発音グレシャムノホーソク〈慣〉ア〈慣〉ル

クレシラス (Kresilas) 紀元前五世紀後半のギリシアの彫刻家。ペリクレスの像の制作(模造が現存)によって有名。生没年不詳。 発音〈慣〉ア〈慣〉ジ

くれ-す-ぐ 【暮過】〔自ガ上二〕 ①次第に、歳月・時節・日が移りかわってゆく。*浄瑠璃・禅師曽我「四、うきなつもすぎ、秋もやうやうくれすぎ、長月上じゅんの事成るに」 ②日がすっかり暮れてしまう。*御湯殿上日記-文明一七年八月二五日「そのひはくれすぎて、御返歌あしたとくまいる」*俳諧・発句題叢-春・上「暮過て梅ほつほつと見ゆる哉〈白図〉」

くれ-すずみ 【暮涼】〔名〕夏の夕方、屋外などに出て涼むこと。夕涼み。*俳諧・古今句鑑-夏「迷ひ子をおくる子もあり暮すすみ〈湖風〉」

クレセント 〔名〕(英 crescent) 上げ下げ窓や、引き違い窓用の締め金物。 発音〈慣〉ア〈慣〉ル

クレゾール 〔名〕(ラテ Kresol) 石炭タール、木タールから得られる無色または淡褐色の液体。化学式 $C_6H_4(CH_3)OH$ 石炭酸の約四倍の殺菌力を持つ。消毒・殺菌・防腐剤として広く利用されている。*太陽のない街〈徳永直〉旗影暗し「家の入口に来ると、クレゾオルの匂ひが強く鼻孔を射た」*美しい村〈堀辰雄〉美しい村「私はその朝はどうしたのかクレゾオルの匂のぷんぷんするサナトリウムの手前から引返した」 発音〈慣〉ア〈奈〉ル〈奈〉ア

クレゾール-せっけんえき ：セキケンエキ【一石鹸液】〔名〕粗製クレゾールとカリ石けんとの混合溶液。消毒・殺菌力が強い。粘膜に触れたり、誤飲したりするとリゾール中毒を起こす。一〇〇～四〇〇倍に薄めて消毒剤に用いる。リゾール。 発音〈慣〉ア

くれ-そ-む 【暮初】〔自マ下二〕暮れはじめる。*風雅・雑中・一六三六「山本はまづ暮そめて嶺高き梢にのこる夕日影かな〈栄子内親王〉」 発音〈慣〉ア

クレソン 〔名〕(ラテ cresson) アブラナ科の多年草。ヨーロッパ原産で、日本に帰化し、各地の流れのふちや湿地に生え、また、生食用に栽培されている。全株無毛で、茎は五〇センチ以上になり、下部は横にはう。葉は奇数羽状で互生し、長さ一〇センチ内外、幅一～五～二センチ。頂小葉が最も大きく、側小葉は一～四対ある。春、花序は茎の先端につき、総状で、小型の四弁の白花を多数つける。果実は一～二センチの長角果。オランダがらし。みずがらし。 発音〈慣〉ア〈慣〉ル

くれ-たけ 【呉竹】〔名〕(「くれ」は中国伝来の意を表わす語) ①植物「はちく(淡竹)」の異名。また、特に御所の清涼殿の庭に植えてある竹についていう。*大和法隆寺文書-天平宝字五年一〇月一日・法隆寺縁起并資財帳〈寧楽遺文〉「壱枚漆塗 茎呉竹形、端銀継」*十巻本和名抄-一〇「管竹 文字集略云管〈入音甘 漢語抄云呉竹也 和語云久礼太計一〉似、筐而下節茂葉者也」*源氏-夕顔「ほどなき庭に、されたるくれ竹、前栽(せんざい)の露は、猶、かかる所も、おなじごときらめきたり」*徒然草-二〇〇「呉竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。〈略〉仁寿殿(じじうでん)のかたにより植ゑられたるは呉竹なり」 ②香の名。羅国(らこく)と真南賀(まなか)の二種がある。 方言 植物。①はちく(淡竹)。山口県厚狭郡 ②まだけ(真竹)。福岡県久留米 語源説 (1)クレ(呉)の国から移植したということから〔和句解・和訓栞・大言海〕。(2)数の多いことから、カズラ竹の義か〔名語記〕。 発音〈慣〉ア〈慣〉ル〈慣〉ア〈慣〉ロ 古語 和名・色葉・名義・和玉・文明・伊京・明応・天正・鎌頭・黒本・易林・書言

くれたけ の 台 (だい・うてな) 仁寿殿の西の庭の敷設。清涼殿東南よりの川竹(かわたけ)の台に対して配置されている格子の籬垣(ませがき)の中に、淡竹(はちく)を植えた所。*川竹の台。*江家次第-八・相撲召仰「自三河竹台南辺、東西行引」幔、自三仁寿殿西溝西辺一北折、自三呉竹台後一北行」*和訓栞「くれたけ 呉竹の台 江次第に見えたり。仁寿殿の前北方にありて、鳥を宿せしめ、夜の明くるを待つがため、朝政の設也と言へり」

くれたけ-の 【呉竹】枕 ①呉竹の節(よ)の意味で、「節(よ)」と同音および同音を含む「世」「夜」「よる」にかかり、また、竹の節(ふし)の意で、「節(ふし)」と同音および同音を含む「ふし」「伏し」、地名の「伏見」にかかる。*竹取「呉竹の竹と竹とを野山にもさやはわびしきふしをのみ見し」*古今・雑下・九五八「世に経(へ)れば言の葉しげきくれ竹の憂きふしごとに鶯ぞ鳴くへよみ人しらず」*後撰・春中・五四「桜花けふよく見てむくれ竹の一夜のほどに散りもこそすれ〈坂上是則〉」*金葉・雑下・六五三「呉竹の伏し沈みぬる露の身も問ふ言の葉に起きぞゐらるるへよみ人しらず」*新古今・冬・六七三「夢かよふ道さへ絶えぬくれ竹の伏見の里の雪の下をれ〈藤原有家〉」 ②竹の葉の意味で、「葉(は)」と同音「は」を含む「言の葉」「端山」などにかかる。また、竹がよく茂っている意で、「しげし」にかかる。*千載・釈教・一二二五「くれたけのむなしと説ける言の葉は三世の仏の母とこそ聞け〈藤原隆信〉」*新勅撰・恋四・九四三「くれたけのしげくも物を思ふかな一夜へだつるふしのつらさにへよみ人しらず〉」*続拾遺・秋下・三二五「くれ竹の端山(はやま)の霧の明けがたになほ夜をこめて残る月影〈定円〉」 ③「くれたけ」に「世」の意味をこめて、世の末という意で、「末」にかかる。*光花・御裳着「光をふ月と見ゆるくれたけの行く末ながき秋の宮には」*玉葉・雑三・二二五「後の世を思ひ置きけむ呉竹のその末までも哀れとは見よ〈滋道法親王〉」*玉葉・雑三・二二五二「この君の御世かしこしと呉竹の末々までもいかで言はれむ〈後嵯峨院〉」 発音〈慣〉ア〈慣〉ル

くれたけ-まど 【呉竹窓】〔名〕竹格子の窓。*浮世草子・本朝桜陰比事・三・一「折ふし夏の夜の呉(クレ)竹まどより飛び入る蚊の声」

ぐれた-す 〔自サ五(四)〕ぐれはじめる。堕落しはじめる。不良になりはじめる。*歌舞伎・青砥稿花紅彩画〈白浪五人男〉-四幕「幼児(がき)の折から手癖が悪く、抜け参りからぐれ出して旅を拝(かせ)ぎに西国(さいこく)を廻って首尾も吉野山」*青春・小栗風葉・春・六「何時頃から那(ああ)頽(グ)れ出いたもんかの」 発音〈慣〉ア〈慣〉ロ〈慣〉タ

くれた-たち 【塊叩】〔名〕(「くれわり(塊割)」に同じ。 方言 ①田畑の土のかたまりをくだく作業。愛媛県831 ②籾(もみ)の穂をたたいて脱穀する農具。一種のからさお。長野県小県郡514

クレタ-とう ：タウ【一島】〔クレタは ラテ Creta〕地中海東部、エーゲ海南端の島。ギリシア領。古代エーゲ文明の中心として繁栄。のちローマ、ビザンチン、トル

コなどの支配をうけ、一九一三年ギリシアに合併された。クノッソス宮殿など多くの遺跡がある。 発音

クレタ-ぶんめい 【一文明】〔名〕紀元前二〇〇〇年頃から紀元前一四〇〇年頃まで地中海のクレタ島で栄えた文明。エーゲ文明の中・後期にあたる。流麗で多彩な陶器、クノッソス宮殿の壁画などが有名。オリエント文明の影響が見られ、ギリシア文化の先がけをなす。 発音クレタブンメイ。 ⓐ

クレタ-もじ 【一文字】〔名〕ギリシア最古の文字。紀元前二一〇〇年から紀元前一一五〇年頃用いられた。絵文字とA・B二種の線文字とがあり、線文字Bだけが解読されている。ミノア文字。 発音 ⓐ

くれち 【塊打】〔名〕(「くれうち(塊打)」の変化した語)稲の根株についている土のかたまりをうちくだく農具。くだき。

クレチアン-ド-トロワ (Chrétien de Troyes) 一二世紀のフランスの物語作家。アーサー王伝説に基づいて、種々の恋愛冒険の韻文詩を書き、宮廷風騎士道物語に新生面を開く。生没年不詳。

ぐれ-ちがい ：ちがひ〔名〕食い違うこと。食い違い。*現代小説の描写法〈岩野泡鳴〉「思想と材料とが融和流合してあるから、自己と作品中の人生とにぐれ違ひが少い」 発音グレチガイ ⓐ

クレチン-びょう ：ビャウ【一病】〔名〕(クレチンはKretin) 先天的な甲状腺機能の不全により、知能や体の発育がいちじるしく遅れる病気。白痴または低能で、生殖器の発育もきわめて悪い。 発音クレチンビョー ⓐ

ぐ-れつ 【愚劣】〔名〕(形動) おろかで、能力が劣っていること。ばからしくて、何のねうちもないこと。くだらないこと。*日葡辞書「Gretna(グレッナ) と」*金色夜叉〈尾崎紅葉〉続・四「全く天性愚劣の致す所と、自ら恨むよりは無いので」*吾輩は猫である〈夏目漱石〉一「教師としては口にすべからざる愚劣(グレツ)の考であるが」*漢書-谷永伝「永与二譚書一曰、〈略〉永等愚劣、不能褒揚万分」 発音 ⓐ

ぐれっ-かえ-す ：かへす【自サ四】非常に怒る。機嫌を悪くする。*歌舞伎・紋尽五人男-序幕「番頭がお前に逢ひたいとて、ぐれっ返(か へ)して探してゐますワ」

くれ-つ-かた 【暮方】〔名〕①日の暮れるころ。夕方。くれがた。*源氏-乙女「辰の日のくれつかた遣はす。御文(ふみ)のうち、思ひやるべし」*浜松中納言-二「くれつかた筑前の守を召して、御文(ふみ)給はせたり」②年や季節などの終わりに近いころ。*源氏-若菜下「年のくれつかたは、対などにはいそがしく、こなたかなたの御営(いとなみ)に」*徒然草-四三「春の暮つかた、のどやかに艶(えん)なる空に」 発音 ⓐ

ぐ-れつ-く 【自カ四】揺れうごく。ぐらぐらする。ぐらつく。*俳諧・当流籠抜「くれついて箸にかからぬ妹背山〈百丸〉」*雑俳・唐子おどり「水桶の尼の天窓がぐれついて」*浄瑠璃・大内裏大友真鳥上三「辺(に)げて見たり戻ったり、心のぐれつく丸太舟」

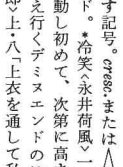
くれつ-ける 【攫付】〔他カ下一〕なぐる。打擲(ちょうちゃく)する。*物類称呼-五「打擲すといふ事を豊前にて、くれつけると云」

くれっ-さい 【呉】〔連語〕 ⓕ 相手に物事を願い頼むことば。ください。大分県日田市958

クレッシェンド 〔名〕(ﾌﾗ cresendo)〈クレシェンド・クレッセンド〉音楽で音を次第に強めること。また、それを表わす記号。cresc.または＜と書く。↔デクレッシェンド。*冷笑〈永井荷風〉一二「一齊の絃楽器は声低く震動し初めて、次第に高まるクレッセンドと次第に消え行くデミヌエンドの抑揚に」*若い人〈石坂洋次郎〉上・八「上衣を通して私の乳房にまで感じられた熱い嘆息がユキ子さんの物も云へない狂喜を強調子(クレッセンド)にもの語って居ました」 発音 ⓐ

くれ-っち 【塊槌】〔名〕「くれわり(塊割)」に同じ。*俳諧・父の終焉日記-五月一一日「畠のさうやくなりと、人々は皆、鎌提(さげ)塊槌もて門を出ければ」

くれ-つづみ 【呉鼓・腰鼓】〔名〕雅楽の呉楽(くれがく=伎楽)に用いた鼓。長い ひもをつけて腰につけ、両手で打ち鳴らす。呉楽とともに廃絶した。ようこ。くれのつづみ。*西大寺資材流記帳-宝亀一一年一二月二五日「寧楽遺文」「呉鼓六十具」*十巻本和名抄-六「腰鼓 〈略〉本朝令云腰鼓師一人〈腰鼓読久礼豆々美 今呉楽所用是〉」 発音 ⓐ ⓒ 今史平安 ●●●●○ 〈余〉 ⓒ


呉鼓
〈正倉院蔵〉

くれつづみ-し 【呉鼓師・腰鼓師】〔名〕雅楽寮の職員の一つ。呉鼓を教えることをつかさどる。*令義解-職員令「雅楽寮条」「腰鼓師 二人〈学教二腰鼓生一〉」 ⓕ 吉辞書和名・名義

ぐれっ-と 【副】 ⓕ 方言①大きく急回転するさま。ぐるっと。「ぐれっとうしろを向いた」秋田県鹿角郡156〈ぐりいっと〉熊本937 ②物の全体のさま。「ぐれっととられてしまった」青森県南部地方19

クレップ 〔名〕 ⇨クレープ

くれて 【呉手】〔名〕①物をくれる人。*虎寛本狂言・惣八「出家の時分には斎非時のくれても有たれども」*明暗〈夏目漱石〉二〇「月給が嫌ひといふよりも、寧(むし)ろ呉(ク)れ手(テ)がなかった程我儘だった」②(動詞に付いた接続助詞「て」をうけて)その事をしてくれる人。*虎寛本狂言・文山立「誰も宿へ知らせてくれてが有るまい」*海に生くる人々〈葉山嘉樹〉二七「私が大切にしないで誰が大切にして呉れ手があらうか」 発音 ⓐ ⓒ 余 ⓒ

くれて-や-る 【呉遣】〔他ラ五(四)〕①物を与えて、遠くへやる。*落窪-一「「さるべき受領あらば、知らずぞ顔にてくれてやらんとしつる物を」②話者が、自分より身分の低い者、いまいましく思っている者に、物を与える。取らす。 ⓕ 方言与える。やる。岐阜県加茂郡042 三重県松阪602 発音 ⓐ ⓒ

くれてん-に 【暮天】〔副〕(暗くなって物が見えなくなるところからいう。下に否定語を伴って)全然。まったく。かいくれ。*浮世草子-本朝二十不孝-三・四「忰子(せがれ)は佇(たたず)むかたも無く、其の日は我家(わがいへ)に有りしが、暮天(クレテン)に行方(ゆきがた)見えずなりにき」*浮世草子-懐硯五・一「与太夫といふ人〈略〉九年あとにくれてんに見えざる事、つどつどにはなしけるうちに」

くれ-どこ 【呉床・牙床】〔名〕いすの一種。上代、中国の胡床(こしょう)にならって作ったもの。あぐら。*延喜式-一七・内匠寮「牙床等料檜榑一村」*十巻本和名抄-六「牙床 遊仙窟云六尺象牙床八下仕荘反俗牀字 楊氏漢語抄云牙床 久礼度古〉」*輿車図考-上・鳳輦「くれ床の名は〈略〉かたちは榻よりも長くせばく、足も直立せし床なるべきなり」 発音 ⓐ 今史平安 ●●○○ 会 ⓒ 吉辞書和名・色葉

くれ-とどめ 【榑止】〔名〕屋根の葺板(ふきいた)をとめるもの。*俳諧・西鶴大句数-一〇「八重葺の花おし春の榑とどめ 明屋にしたる藤の店かり」*浮世草子-本朝二十不孝-一・二「八月廿三日の大風諸木根をうちかへし、〈略〉板庇(いたひさし)も榑止(クレトドメ)のみ残りて」*浮世草子-貧人太平記-下「取ふきの風待つ屋根のまばらなるに、くれとどめ落ちかかり」

くれない くれなゐ【紅】〔名〕(「呉(くれ)の藍(あい)」の変化した語)①植物「べにばな(紅花)」の異名。〈季・夏〉*万葉-一一・二八二七「紅(くれなゐ)の花にしあらば衣手に染めつけ持ちて行くべく思ほゆ(作者未詳)」*重訂本草綱目啓蒙-一一・隰草「くれなゐ〈略〉べにのはな、くれなゐのはな 雲州」②赤く鮮明な色。紅花の汁で染めだした紅色。臙脂(えんじ)色。*万葉-一八・四一〇九「久礼奈為(クレナキ)は移ろふものを橡(つるばみ)の馴れにし衣になほしかめやも〈大伴家持〉」*古今・雑体・一〇四四「紅にそめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなりよみ人しらず」*枕・一一九・あはれなるもの「隆光が主殿(とのもり)の助には、青色の襖(あを)、くれなゐの衣、すりもどろかしたる水干といふ袴を着せて」*大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点・八「柳みどり桃紅(クレナキ)にして、松青く霧みどりなり」③江戸時代、京都で染めた紅絹。京紅。*雑俳・柳籠裏・五月二八日「しわひ所(とこ)とてくれなひが上手也」*雑俳・柳多留二二「紅は全体しはいとこで出来」④香の名。伽羅の一種。〔香名私録〕 方言植物、べにばな。広島県比婆郡峯田751 語源説(1)「語源」「他ラ五(四)」①物を与えて、遠くへやる。*落窪-一「「さるべき受領あらば、知らずぞ顔にてくれてやらんとしつる物を」②話者が、自分より身分の低い者、いまいましく思っている者に、物を与える。取らす。 ⓕ 方言与える。やる。岐阜県加茂郡042 三重県松阪602 発音 ⓐ ⓒ

くれない-の-ぎょく 【紅玉】〔名〕紅色の意味。〔万葉代匠記・和字正濫鈔・日本釈名・東雅・南留別志・関秘録・安斎随筆・東牖子・大言海・増補国語研究=金田一京助〕(1)クレアキ(黄昏天居)の義〔言元梯〕。(3)花は紅色で、葉は藍に似るところから、クレナキノアキ(紅藍)の約〔滑稽雑談所引和訓義解〕。(4)クロ(黒)クナキの義か〔和句解〕。(5)クレノヒ(暮日)の義。暮方の日は、格別赤いものであるところから〔名語記〕本朝辞源=宇田甘冥〕。(6)紅色の意のクレナイは、クレノアイの約。クレは「紅」の別音Kuに、ラ行の諸音を添えた語。アイは染料の義の「絵」の別音Aiから〔日本語原考=与謝野寛〕。 発音 ⓐ ⓒ ⓕ 今史平安・江戸 ●●○○ 余 ⓒ 吉辞書色葉・名義・和玉・文明・明応・黒本・書言

くれない-の-ぬの 【紅の布】〔名〕紅色が美しく映える。*万葉-一九・四一三九「春の園紅爾保布(クレナヰニホフ)桃の花下照る道に出で立つをとめ〈大伴家持〉」*新古今・春上・四一「をられけり紅にほふ梅の花けさしろたへに雪はふれれど〈藤原頼道〉」

くれない-に-つき-だし 【紅に月出】(いだし)**した-る-おうぎ** (おうぎ) 紅の地紙に、月を描いた扇。*曾我物語・六・弁才天の御事「座敷をたたばやと思ひければ、くれないに月いだしたるあふぎひらき」*仮名草子-恨の介-下「語り詰りの燈火を、くれなゐに月いだしたるあふぎにて、さっさっと煽ぎ消し」

くれない-に-ひ-だし 【紅に日出】(いだし)**した-る-おうぎ** (おうぎ) 紅の地紙に、日輪を描いた扇。*幸若・敦盛「腰よりも、くれなゐに日出だしたるあふぎぬき」

くれない-の-あめ 【紅の雨】(あめ) 紅雨(こうう)。*相模集、浅みどり春めづらしく一しほに花の色ますくれなゐのあめ」

くれない-の-あんどん 【紅の行燈】 甘酒屋の行燈、看板。白地に紅で甘酒と書いた。*雑俳・柳多留-三三「くれないの行燈素見当てに出し」

くれない-の-うすよう 【紅の薄様】 女房の装束または懐紙などの襲(かさね)の色目の名。*蜻蛉-下・天延二年「文とりてかへりたるをみれば、くれなゐのうすやうひとかさねにて、紅梅につけたり」*源氏-浮舟「くれなゐのうすやうに、こまやかに書きたるべし」*十訓抄-七・白河法皇雪見御幸小野皇太后宮事「宮の女房の中に。紅のうすやう着たるが三人候けるを」*増鏡-一一・さしぐし「くれなゐのうすやう、おなじ薄様にぞ包まれたんめる」

くれない-の-うみ 【紅の海】(うみ) 夕日が映えて赤く見える海。*浄瑠璃・天神記-二「遥かに見れば、夕陽の影は残って、紅(クレナキ)の海を泳ぐは妻の十六夜」

くれない-の-うめ 【紅の梅】(うめ) 「こうばい(紅梅)➊①」に同

じ。*宇津保-春日詣「おなじき侍従源ただまさ『くれなゐのむめ』春雨の花にふりおく紅にそめてそむらし春のさほ姫」*永久百首-春「匂ふ香もなつかしきかなわぎもこが衣に染むる紅のむめ〈源忠房〉」

くれない の 霞(かすみ)　朝日や夕日が映って赤く見える霞。*土御門院集「くれなゐのかすみに今朝やにほふらん雪の村の春の初花」*光悦本謡曲・小塩「あかねさす日もくれないのかすみか雲か」

くれない の 装束(しょうぞく)　成人の朝服の単(ひとえ)袴などの下着の色目。未成年の赤の濃い濃色(こきいろ)の装束に対していう。*餝抄-上「三位中将兼長申」慶、或秘記曰、今日始着=紅装束-〈先先濃装束〉」*後照念院殿装束抄「改=濃装束-着=紅装束-事。〈多上階後着〉之〉」

くれない の 末摘花(すえつむはな)　(花を末の方から摘み取って紅(べに)をつくるところから)植物「べにばな(紅花)」の異名。*万葉-一〇・一九九三「外(よそ)のみに見つつ恋なむ紅乃末摘花(くれなゐノすゑつむはな)の色に出でずとも(作者未詳)」*古今-恋一・四九六「人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花の色にいでなんよみ人しらず〉」

くれない の 千入(ちしお)　紅色に、何度も染め上げること。濃い紅色をいう。*金槐集-雑「くれなゐのちしほのまふり山のはに日のいる時の空にぞありける」*御伽草子・鉢かづき「十二ひとへの御袖、くれなゐのちしほの袴、数の宝物を入れられたり」*仮名草子・恨の介-上「くれなゐのちしほの袴を踏みしだへ、肌には何をか召されけん」

くれない の 塵(ちり)　(紅塵(こうじん)の訓読)浮世の塵。俗世間の塵。*新撰六帖-一「苔深き緑の洞はくれなゐのちりの外なるすみかなりけり〈藤原家良〉」

くれない の 涙(なみだ)　①悲しみのあまり流す涙。血の涙。*宇津保-俊蔭「あしたに見て、ゆふべの遅なるほどだに、紅のなみだをおとすに」*源氏-乙女「くれなゐのなみだにふかき袖の色を浅みどりにや言ひしをるべき」②深く感動して流す涙。感涙。*宇津保-祭の使「藤英、くれなゐのなみだを流して」*浜松中納言-二「中納言のつくり給へる御文に、もろこしの人々も、この世の人も聞くかぎり、くれなゐの涙をながして」③(「紅涙」の訓読み)女性の流す涙。*平家-八-太宰府落「蘆火たく屋のいやしきにつけても、女房達つきせぬ物おもひに紅の涙せきあへねば、翠の黛みだれつつ、其人とも見え給はず」

れない の 匂(にお)い　「くれないにおい(紅匂)」に同じ。*満佐須計装束抄-三「女房の装束のいろ〈略〉くれなゐのにほひ〈略〉くれなゐのうすやう」

くれない の 袴(はかま)　成人女子がつける袴。緋の袴。*枕-四五-にげなきもの「下衆(げす)の紅のはかま着たる。この頃はそれのみぞあめる」*謡曲・雲林院「ある花のもとに束帯給へる男、紅の袴召されたる女性」

くれない の 初花染(はつはなぞめ)　濃い紅色に染めること。また、その色。*古今-恋四・七二三「紅のはつ花ぞめの色ふかく思ひしこころわれわれすれめやよみ人しらず」

くれない の 筆(ふで)　婦人用の軸の赤い筆。転じて、男女贈答の恋文。*金葉-恋上・三九六「文ばかりおこせて、いひ絶えにける人の許にいひつかはしける。ふみそめて思ひかへりし紅の筆のすさびをいかで見せけむ〈小大進〉」

くれない の 文(ふみ)　軸の赤い筆で書いた手紙。恋文をいう。*新撰六帖-五「幾かへり染めて色濃きくれなゐの文見しあとも今は絶えつつ〈藤原家良〉」

くれない の 振出(ふりで)**の色**(いろ)　紅花(べにばな)を水に振り出して染めた色。*永久百首-春「紅のふりでの色の岡つつじ妹がま袖にあやまたれつつ〈藤原仲実〉」

くれない の 峰(みね)　紅葉(もみじ)などで紅色につづいた峰。*大観本謡曲・松尾「西ぐれなゐの峰の洞はくれなゐのちりの外なるすみかなりけり〈藤原家良〉」

くれない の 帽(まみ)　紅花(べにばな)を水に振り出して染めた色。*永久百首-春「紅のふりでの色の岡つつじ妹がま袖にあやまたれつつ〈藤原仲実〉」

くれない の 峰(みね)　紅葉(もみじ)などで紅色につづいた峰。*大観本謡曲・松尾「西ぐれなゐの峰の洞はくれなゐのちりの外なるすみかなりけり〈藤原家良〉」

くれない の 振出(ふりで)**の色**(いろ)　紅花(べにばな)を水に振り出して染めた色。*永久百首-春「紅のふりでの色の岡つつじ妹がま袖にあやまたれつつ〈藤原仲実〉」

くれない の 文(ふみ)　軸の赤い筆で書いた手紙。恋文をいう。*新撰六帖-五「幾かへり染めて色濃きくれなゐの文見しあとも今は絶えつつ〈藤原家良〉」

くれない の 筆(ふで)　男女贈答の恋文。*金葉-恋上・三九六「文ばかりおこせて、いひ絶えにける人の許にいひつかはしける。ふみそめて思ひかへりし紅の筆のすさびをいかで見せけむ〈小大進〉」

くれない の 初花染(はつはなぞめ)　濃い紅色に染めること。また、その色。*古今-恋四・七二三「紅のはつ花ぞめの色ふかく思ひしこころわれわれすれめやよみ人しらず」

くれない の 葉(は)　(紅葉(もみじ)の訓読み)紅葉(もみじ)。*相模集「幾しほのもみぢふりてかたつた姫くれなゐのはを深く染むらん」

くれない の 袴(はかま)　成人女子がつける袴。緋の袴。*枕-四五-にげなきもの「下衆(げす)の紅のはかま着たる。この頃はそれのみぞあめる」*謡曲・雲林院「ある花のもとに束帯給へる男、紅の袴召されたる女性」

くれない の 初花染(はつはなぞめ)　濃い紅色に染めること。また、その色。*古今-恋四・七二三「紅のはつ花ぞめの色ふかく思ひしこころわれわれすれめやよみ人しらず」

くれない の 筆(ふで)　婦人用の軸の赤い筆。転じて、男女贈答の恋文。*金葉-恋上・三九六「文ばかりおこせて、いひ絶えにける人の許にいひつかはしける。ふみそめて思ひかへりし紅の筆のすさびをいかで見せけむ〈小大進〉」

くれない の 文(ふみ)　軸の赤い筆で書いた手紙。恋文をいう。*新撰六帖-五「幾かへり染めて色濃きくれなゐの文見しあとも今は絶えつつ〈藤原家良〉」

くれない の 振出(ふりで)**の色**(いろ)　紅花(べにばな)を水に振り出して染めた色。*永久百首-春「紅のふりでの色の岡つつじ妹がま袖にあやまたれつつ〈藤原仲実〉」

くれない の 峰(みね)　紅葉(もみじ)などで紅色につづいた峰。*大観本謡曲・松尾「西ぐれなゐの峰の洞はくれなゐのちりの外なるすみかなりけり〈藤原家良〉」

くれない の 帽(まみ)　紅花(べにばな)を水に振り出して染めた色。*永久百首-春「紅のふりでの色の岡つつじ妹がま袖にあやまたれつつ〈藤原仲実〉」

くれない の 振出(ふりで)**の色**(いろ)　紅花(べにばな)を水に振り出して染めた色。*永久百首-春「紅のふりでの色の岡つつじ妹がま袖にあやまたれつつ〈藤原仲実〉」

くれない の 文(ふみ)　軸の赤い筆で書いた手紙。恋文をいう。*新撰六帖-五「幾かへり染めて色濃きくれなゐの文見しあとも今は絶えつつ〈藤原家良〉」

くれない の 筆(ふで)　男女贈答の恋文。*金葉-恋上・三九六「文ばかりおこせて、いひ絶えにける人の許にいひつかはしける。ふみそめて思ひかへりし紅の筆のすさびをいかで見せけむ〈小大進〉」

くれない の 初花染(はつはなぞめ)　濃い紅色に染めること。また、その色。*古今-恋四・七二三「紅のはつ花ぞめの色ふかく思ひしこころわれわれすれめやよみ人しらず」

くれない の 袴(はかま)　成人女子がつける袴。緋の袴。*枕-四五-にげなきもの「下衆(げす)の紅のはかま着たる。この頃はそれのみぞあめる」*謡曲・雲林院「ある花のもとに束帯給へる男、紅の袴召されたる女性」

くれない の 葉(は)　(紅葉(もみじ)の訓読み)紅葉(もみじ)。*相模集「幾しほのもみぢふりてかたつた姫くれなゐのはを深く染むらん」

くれない の 涙(なみだ)　①悲しみのあまり流す涙。血の涙。*宇津保-俊蔭「あしたに見て、ゆふべの遅なるほどだに、紅のなみだをおとすに」*源氏-乙女「くれなゐのなみだにふかき袖の色を浅みどりにや言ひしをるべき」②深く感動して流す涙。感涙。*宇津保-祭の使「藤英、くれなゐのなみだを流して」*浜松中納言-二「中納言のつくり給へる御文に、もろこしの人々も、この世の人も聞くかぎり、くれなゐの涙をながして」③(「紅涙」の訓読み)女性の流す涙。*平家-八-太宰府落「蘆火たく屋のいやしきにつけても、女房達つきせぬ物おもひに紅の涙せきあへねば、翠の黛みだれつつ、其人とも見え給はず」

れない の 匂(にお)い　「くれないにおい(紅匂)」に同じ。*満佐須計装束抄-三「女房の装束のいろ〈略〉くれなゐのにほひ〈略〉くれなゐのうすやう

して色を染めるところから、「振り出づ」にかかる。*古今・恋二・五九八「紅のふりでつつ泣く涙には袂（たもと）のみこそ色まさりけれ〈紀貫之〉」*千五百番歌合・三七八番「紅のふり出でてぞ鳴く郭公（ほとときす）紅葉の山にあらぬものゆゑ〈慈円〉」④紅花で何度も染める意で、何回も染料に浸す意の「やしほ」を介して、地名「やしほの岡」にかかる。*按納言集「くれなゐのやしほの岡の岩つつじこや山姫のまふりての袖」*新勅撰・秋下・三四〇「くれなゐのやしほの岡のもみぢ葉をいかに染めよと鹿ぞらん〈藤原伊光〉」⑤紅花の色をうつす意で「うつし」にかかる。*万葉・七・一三四三「こちたくはかもかもせむを石代の野辺の下草苦し刈りてば、一云、紅之（くれなゐの）うつし心や妹に逢はざらむ〈作者未詳〉」⑥染料の灰汁（あく）の意で、同音の「飽（あ）く」にかかる。*拾遺・恋五・九七八「限りなく思ひそめてし紅の人をあくにぞ帰らざりける〈よみ人しらず〉」

くれない-まきぞめ くれなゐ:【紅巻染】〔名〕「くれないしぼり（紅絞）」に同じ。*随筆・守貞漫稿・一七「昔も紅巻染と云あり。布を糸に巻て紅染にして後糸をとき退くれば今云紅絞也。是は縦か横歟未詳」

くれない-みずひき くれなゐみづひき【紅水引】〔名〕紅白の水引で、赤の部分を濃い紅色にした水引。*随筆・守貞漫稿・八「白と真紅の物あり。俗にくれなゐ水引と云。濃紅にして黒の如し」

くれない-むらこ くれなゐ:【紅斑濃】〔名〕染色の名。薄い紅色の中に所々に濃い紅色があるもの。*たまきはる「三日、なにもみなくれなゐむらご、うはぎからぎぬに、まつとたけとのすゑのよをなとおかれたり」

くれない-もみじ くれなゐもみぢ【紅紅葉】〔名〕女房の衣の襲（かさね）の色目。紅、山吹、黄、青、濃い紅、淡紅の順に重ねたもの。*満佐須計装束抄・三「女房さうぞくの色〈略〉くれなゐもみぢ。くれなゐ。やまぶき。きなる。あをき。こきうすきくれなゐのひとへ」*曇花院殿装束抄「五つ衣単色目事〈略〉紅もみぢ 一朱〈あか紅也〉・二同〈こく少くろめり〉・三丹・四黄・五六・六朱〈こく紅也〉・七朱」

ぐれ-なかま 【名】定職がなく、道にはずれた生活をしている者の仲間。不良仲間。*歌舞伎・三人吉三廓初買・四幕「こなたも年寄りだが、眉間（みけん）の疵を見るに付け、堅気と見えぬぐれ仲間（ナカマ）」〔発音〕〈會ノ〉〔ア〕

ぐれなす 【動】相反目することをいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

くれ-なず-む ：なづむ【暮泥】〔自マ四〕日が暮れそうで、なかなか暮れないでいる。

くれ-な-る 【略成】〔自ラ四〕暗くなる。*風雅・春中・一九四「そことなき霞の色にくれなりて近き梢の花もわかれず〈徽安門院〉」

くれ-に 【暗】〔副〕暗いさま、心が晴れないでふさいでいるさまなどを表わす。*書紀・齊明四年一〇月・歌謡・水門（みなと）の潮の下り海下りうしろも倶例尼（クレニ）置きてか行かむ」*万葉・一〇・一九一「さにつらふ妹を思ふと霞立つ春日も晩爾（くれニ）恋ひわたるかも〈作者未詳〉」

くれ-ぬき 【縛貫】〔名〕「くれいた（縛板）」に同じ。

くれ-の-あい ：ある【呉藍】〔名〕植物。べにばな（紅花）の異名。*十巻本和名抄・六「紅藍 弁色立成云紅藍〈久久礼乃阿井〉呉藍〈同上〉本朝式云紅花俗用之」*俳諧・改正月令博物笙・五月「紅花〈略〉呉藍（クレノアイ）くれないこの略言なり」〔古辞書和名・色葉・名義・書言〕

くれ-の-おも 【呉母・蘐香】〔名〕植物「ういきょう（茴香）」の異名。《季・夏》*本草和名「蘐香子 一名時羅 一名懐芸 一名香芸 和名久礼乃於毛」*俳諧・滑稽雑談・七月「蘐香（クレノオモ）〈略〉是又茴香と称する者也。古俳書に茴香の実八月部に註す。此者歌にもよめり、しかれども俳書、くれのをもの沙汰なし、尤花実皆秋に許用すべし」〔語源説〕(1)クレ（呉）の国からの移植であることから。オモはウン（ŭ）の呉音ヲンの転〔大言海〕。(2)クレノオモヒグサ（呉思草）か〔名言通〕。〔古辞書和名・色葉・名義・下学・文明・伊京・書言〕

ぐれ-の-き 【名】〔方言〕樹木、しゃしゃんぼ（南燭）。高知県802《ぐれ》徳島県海部郡・高知県802

くれ-の-く 【暮退】〔自カ四〕すっかり日が没したり、季節が移ってしまったりする。*浮世草子・諸道聴耳世間猿・五・一「世上は夏過ぎて盂蘭盆もいつしか暮れのけば、人も袷の肌にしっぽりと」

くれ-の-こ-る 【暮残】〔自ラ五（四）〕日が沈んだあとに、しばらく明るさが残る。*青春・小栗風葉・夏・九「旋て木槿の花の仄白く暮れ残った垣の内へ入って行くと」〔発音〈會ノ〉〕〔コ〕

くれ-の-はじかみ 【呉薑】〔名〕植物「しょうが（生薑）」の古名。*享和本新撰字鏡「干薑 久礼乃波自加弥」*本草和名「乾薑 一名定姜生姜〈略〉和名久礼乃波之加美」〔古辞書字鏡・和名・名義〕

くれのはじかみ-の-うど 【呉薑独活】〔名〕植物「くまたけらん（熊竹蘭）」の異名。*本草和名「高凉薑 和名加波禰久佐 一名久礼乃波之加美乃宇止」

くれ-の-みず 【呉蚯蚓】〔名〕「かいこ（蚕）」の異名。*享和本新撰字鏡「蚕 久礼乃彌々受」〔語源説〕クレ（呉）の国のみみずの義。渡来した品種の形が、みみずに似ていたところから〔大言海〕。〔古辞書字鏡〕

くれは 【暮端】〔名〕暮れぎわ。日暮れどき。*歌謡・田植草紙・晩歌・三番「さ月早少女（そうとめ）くれはの声はおもしろ。さ声おもしろ」

くれは 【呉服】〔名〕謡曲。脇能物。各流。作者未詳。朝臣が呉服（くれは）の里に行くと、松原で応神天皇の時唐から渡ってきた織女の呉織（くれはとり）、漢織（あやはとり）という二人の女が機を織っており、渡来した時の様を語って、大君に奉る錦を織ることを約して立ち去る。明け方、呉織が現われて錦を織り、御代を祝って舞を舞う。〔発音〈會ノ〉〕〔ロ〕

くれ-は 【呉綾】〔枕〕（「くれはとり（呉織）」の略）「あや」にかかる。*浄瑠璃・頼光跡目論・三「大色（おほしき）青色（せいしき）紫や、くれはあやどるあやのもん」

くれば 〔名〕黄昏、夕暮をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

くれ-はし 【呉階】〔名〕屋根や欄干のついた階段。*枕・一二〇「正月寺に籠りたるは、清水（きよみづ）などにせて、局する程、くれはしのもとに、車ひきよせて立てたるに」*菅笠日記・上「まづ門を入て、くれはしをのぼらんとする所に、たがことかはしらねど、だうみゃうの塔とて、右の方にあり」〔補注〕和訓栞に「榑楷（くれはし＝荒木で組んだ階段）」説を出すが、疑問。

くれ-はし 【呉橋】〔名〕中国風の橋。欄干をつけた反（そ）り橋をいうか。*書紀・推古二〇年是歳・北野本南北朝期訓「須彌山形（すみせんのかたち）及び呉橋（クレハシ）を南庭に構けと令す」*宇津保・楼上上「かくて楼に登り給ふべきほどのくれはしは、いろいろの木を交ぜ交ぜに造りてしたより流るる水はすくして見ゆべく造る」〔語源説〕(1)呉式の橋の義〔日本古語大辞典＝松岡静雄〕。(2)庫に登るために作った梯子をいうクラハシ（庫梯）の転〔万葉集古義〕。

クレバス 【名】(ｸﾚﾊﾞｽ・英 crevasse) 氷河、雪渓などの深い割れ目。*氷壁・井上靖・一〇「急な傾斜のガラ場が続く。暫くすると雪渓になる。ところどころにクレバスが口を開けている」*女面・円地文子・一「マッターホルンに登山する途中クレバスに落ちこんで死んだ登山家らしい、と言った」〔発音〈會ノ〉〕〔ク〕〈奈ノ〉〔レ〕

クレバス 【名】(Crayপas 元来は商品名) 顔料を軟質油で固めた棒状の画材。日本独特のもので、クレヨンとパステルの特長を取り入れ、色を重ねたり混ぜることができる。*往来・永井龍男・一「頼子はもうお姉ちゃま絵をかきませうと、クレバスの箱を抱へて〈略〉寄って居た」〔発音〈會ノ〉〕〔レ〕〈奈ノ〉〔レ〕

くれ-は-てる 【暮果】〔自タ下一〕〔文〕くれはっ（自タ下二）(1)日がすっかり暮れてしまう。*後撰・秋中・二九四「くれはてば月も待つべし女郎花（おみなへし）雨やめてとは思はざらなん〈藤原実頼〉」*蜻蛉・下・天禄三年「ここちあやしうなやましうて、くれはつるまでながめ暮らしつ」②月、季節、年などが押しつまる。*安法集「暮はつる年惜しみかね打ちふさぎゆめ見む程に春はきぬべし」*徒然草・一九「年の暮はてて、人ごとに急ぎあへる比ぞ、またなくあはれなる」〔発音〈會ノ〉〕〔テ〕〈奈ノ〉〔ロ〕〔ロ〕〔文〕『くれはつ』〈會ノ〉〔ハ〕〈奈ノ〉〔ロ〕

くれ-はとり 【呉織・呉服】（「くれはどり」とも。「はとり」は「機織（はたおり）」の変化した語）■〔名〕①呉（くれ）の国から渡ってきた織工。織物の技術者。また、その織工の名ともされた。*古事記・中・又、手人（てひと）韓鍛（からかぬち）名は阿素・亦、呉服（くれはとり）の西素二人を貢上（たてまつり）き。*書紀・雄略一四年正月（前田本訓）「呉の献（たてまつ）れる手末（てひと）・才伎漢織（あやはとり）呉織（クレハトリ）と衣縫（きぬぬひ）の兄媛（えひめ）・弟媛（おとひめ）等を将（ゐ）て住吉（すみのえ）の津に留（とどま）る」*読本・椿説弓張月・後・一七回「皆是（みなこれ）、往昔（いにしへ）呉織（クレハドリ）漢織（あやはどり）の男法にして、徐福とともに渡り来し女（め）の童より伝へたり」②呉の国から伝来した手法による絹織物。綾模様のある絹織物。*後撰・恋三・七二三・詞書「道にて人の志送りて侍りけるくれはとりといふ綾を二むら包みて遣はしける」*雑俳・雪の笠「鳥ならばもどれしちやの呉服」■〔枕〕「くれ」に「来れ」「暮れ」などを掛けて用いることが多い。①■②の織物に綾があるところから「あや」にかかる。*あやはとり」と併称されるからだともいう。*後撰・恋三・七一三「くれはとりあやに恋しくありしかば二村山も越えずなりにき〈清原諸実〉」*金葉・恋上・三九〇「あひ見んと頼むればこそ呉服あやしやいかが立ち帰るべき〈源顕国〉」*玉葉・秋上・四七七「稀に逢ふ秋の七日のくれはとりあやなくやがて明けぬこの夜は〈小侍従〉」*謡曲・安宅「これについてもなほ人に心なくれそ呉織（くれはどり）怪しめらるな面々」②「くれはどり」に鳥の意をこめて、鳥の縁で「音（ね）」につづく。また、「浮き寝」につづくとみて、その同音「憂き音」にかかるともする。*謡曲・清経「聞くに心も呉織（くれはどり）憂き音に沈む涙の雨の恨めしかりける契りかな」〔語源説〕クレハタオリ（呉機織）の義〔万葉代匠記・日本釈名・南留別志・雅言考・大言海〕。〔発音〈會史〉室町頃かは〕〔ア〕〈會ノ〉〔ハ〕〔古辞書下学・文明・伊京・明応・天正・黒本・易林・書言〕

くれはの-さと 【呉服里】摂津国の古名。呉織（くれはとり）が住んでいたところからいう。*光悦本謡曲・呉服・道も すぐなる難波がた、行への浦も名を得た」*呉服・道も里に着きにけり」

ぐれ-はま 【名」「ぐりはま」の変化した語。*詞葉新雅「クイチガウ たがふ グレハマニナル 同上」*人情本・恩愛二葉草・二・四章「斯う何も彼も鯔鰔（グレハマ）に成って」*歌舞伎・早苗鳥伊達聞書（実録先代萩）・二幕「其の魂胆（こんたん）もぐれはまに、馴れぬ事とて生捕られ残念な事でござりまする」*其面影・二葉亭四迷・一・一「万事が鯔鰔（グレハマ）の思ふ様にならぬ焦燥（もどかれった）さは」〔方言〕物事が中途でひっくりかえること。途中でだめになること。名古屋579〔発音〈會ノ〉〕〔ロ〕

ぐれ-はまぐり 【名」「ぐりはま」に同じ。*歌舞伎・夢

結蝶鳥追(雪駄直)-序幕『ええ忌(いめ)えましい、折角吾代(のみしろ)にしようと思ったを』『いらざる奴がうせたばかり、とうとう仕事はぐれ蛤(ハマグリ)』 発音グレハマグリ 〈豊〉マ

くれは-まつり【呉服祭】〔名〕大阪府池田市にある呉服神社(くれはじんじゃ)で行なわれる陰暦九月一八日(現在、一二月一八日)の例祭。前日に行なわれる近くの穴織神社(あやはじんじゃ)の穴織祭(あやはまつり)とともに一連の祭礼として知られる。〈季・秋〉*俳諧-増山の井-九月「呉服祭 十八日、あやはまつりは十七日也。津の国池田にあり」*俳諧-太祇句選-秋「きりはたりてうさやようさや呉服祭」 発音〈豊〉マ

くれ-ばらい …ばらひ【暮払】〔名〕掛代金(かけだいきん)などを年末に払うこと。また、その支払い。 発音〈豊〉ハ

くれ-びき【榑引】〔名〕榑を鋸(のこぎり)で挽(ひ)くこと。また、それを業とする人。*実隆公記-大永四年一〇月三〇日「造作大工両人来、をか引一人、榑引二人〈榑千二百支、皆引之了〉」*高野山文書-(天文一三年)奥院興隆作事入目日記(大日本古文書三・五一一)「一 次御供所造立之事〈略〉榑引百十工」

クレピス〔名〕(ギ Krepis) ギリシア神殿で、基壇の周囲に台座のようにめぐらした最下の階段。普通三段からなり、最上の床面にあたるのをステロバテスという。

くれ-びと【呉人】〔名〕中国の南北朝時代(四三九～五八九、建康(南京)の地に都を置いた南朝の宋・齊・梁・陳の国の人を、古代の日本人が呼んだ称。*古事記-下「此の時、呉人(くれひと)参渡(まいわた)り来つ」*書紀-雄略一四年三月「臣連に命せて呉の使を迎ふ。即ち呉人を檜隈野に安置(はむべ)らしむ」 発音〈豊〉ロ

くれ-ふさが-る【暗塞】〔自ラ四〕「くれふたがる(暗塞)」に同じ。*続古事談-五「けぶり満ちもて、王宮の内くれふさがりぬ」*名語記-六「寒中のくれふさがりたる日をしみたりといへる」

クレブス (Sir Hans Adolf Kreb サー＝ハンス＝アドルフ―) 生化学者。ドイツに生まれ、イギリスに帰化。細胞の物質代謝に関する「クレブス回路」を提唱。一九五三年ノーベル生理・医学賞を受賞。一九〇〇年生。 発音〈豊〉レ

クレブス-かいろ …クヮイロ【―回路】〔名〕クレブスによって明らかにされた細胞における有機酸の道筋の一つ。枸櫞酸(くえんさん)回路。TCA回路。 発音〈豊〉ア

くれ-ふたが-る【暗塞】〔自ラ四〕①一面に暗くなる。全くの暗闇となる。くれふさがる。*今昔-二四・一「四方に暗塞りて、物も思へずして侍りしを」 ②心が暗くなる。希望がなくなる。悲しみに沈む。くれふさがる。*前田本枕-二九一・いまはしめていふべきことには「文といふものならましかば、いかにいふぜむ世の中くれふたがりておぼえまし」*大鏡-六・道長下「冷泉院の御世となりてこそ、世はくれふたがりたる心地せしものかな」*増鏡-八・あすか川「その日の西(とり)の時にかくれさせ給ひぬ。院の中くれふたがりて、闇に迷ふ心もすべし」 発音クレフタガル 〈豊〉フ

くれ-ぶね【榑船】〔名〕榑を運送する船。特定の船型を意味しない。江戸時代以降、材木船と汎称される。*西野文書「従他国塩并榑船着岸時」*山家集-中「くれふねよ朝妻わたり今朝なせそ伊吹の嶽に雪風巻(しま)くめり」*和漢船用集-五・江湖川船之部「くれ舟〈略〉あさつま山によめり。くれと云木を積舟の名なり」

くれ-へぎ【榑剝】〔名〕丸太の材木を鉋(かんな)で削ること。また、それを業とする人。*浮世草子-小夜嵐-三〇「はや見るがうちにささぶき、くれへぎなども傭はれ、壁塗り番匠のひまもなく」

クレペリン (Emil Kraepelin エミル―) ドイツの精神医学者。ブントの心理学を基礎として、精神病の分類、体系化を行なう。近代実験精神病学を建設し、クレペリン検査の端緒を開いた。主著「精神医学概論」。(一八五六～一九二六) 発音〈豊〉ケ

クレペリン-けんさ【―検査】〔名〕クレペリンが実験心理学の成果として創始した連続加算による作業検査。性格検査として用いられる。 発音〈豊〉ケ

くれ-まぎれ【暮紛】〔名〕暮れ方の暗さに紛れること。また、そのような時刻。*浄瑠璃-卯月の紅葉-中「壁を破って逃げ出〈略〉このくれまぎれに早ふ早ふと言ひければ」

くれ-まだき【暮夙】〔名〕暮れるにはまだ少し間のある時分。日没前のひととき。*俳諧-夜半叟句集「暮まだき星の輝く枯野かな」 発音〈豊〉ア

クレマチス〔名〕(ギ Clematis) キンポウゲ科センニンソウ属植物の総称。世界の温帯地方に一五〇～二〇〇種分布し、日本にもセンニンソウ、ハンショウヅル、テッセン、カザグルマなどがある。園芸上は、鉢植え・花壇・切り花用に栽培される大輪咲きの種類や、カザグルマテッセンの改良品種をさしていう。 発音〈豊〉マ

くれ-まど-う …まどふ【暗惑】〔自ハ四〕心がくらんで迷う。悲しみのために思慮・分別を失う。*宇津保-楼上上「雲井なる桂にかかるあふひかも向はぬ程ぞくれまどひける」*源氏-桐壺「くれまどふ心の闇も堪へがたき片はしをだに、はるくばかりに聞えまほしう侍るを」*栄花-鳥辺野「いづくも、この御光にあたりつる限りは皆くれまどひたり」*増鏡-一六・久米のさら山「空しき御車を泣く泣くやりかへるとて、くれまどひたる気色(汁しき)、いと堪へがたげなり」

クレマンソー (Georges Clemenceau ジョルジュ―) フランスの政治家。急進社会党の闘士として代議士に当選し、議会演説によって多くの内閣を倒し、「虎(とら)」とあだ名された。一九〇六～〇九年首相就任。第一次世界大戦中再度首相に就任し、戦争を勝利に導き、パリ講和会議ではフランスの全権となり、ドイツに天文学的数字の賠償金を要求した。(一八四一～一九二九) 発音〈豊〉マ

くれみ-ぐさ【暮見草】〔名〕心をいう。夕見草。*莫伝抄「花と月なくば何をかくれみ草山の外にも雲のあれども」*善喩尽-四「暮見草(クレミグサ)心を云」

くれむつ【暮六】〔名〕昔の時刻の名。暮れの六つ時、すなわち今の午後六時ごろ。西(とり)の刻。また、その刻限に鳴らす鐘。↓明け六つ。*雑俳-へらずロ〈不角撰〉「暮六の鐘にも散らぬ花の友」*浄瑠璃-大経師昔暦-中「二親もない奴凧(やうやう)伯父が太平記の講釈、暮六つから四つ時分迄口をたたいて」*談義本-風流志道軒伝-三「ふらりふらりと居眠(いねむ)り、寝耳へはいる暮六も、鐘は上野か浅草を」 発音〈全〉ク

クレムリン (ロ Kremlin ロシア語ではクレムリ krjeml' 「城砦」の意) Ⅰ〔名〕中世、ロシアの各都市にあった城砦。 Ⅱ「クレムリンきゅうでん(―宮殿)」の略。転じて、ソ連政府またはソ連共産党の意に用いられる。 発音〈豊〉レ 〈奈〉ア 〈ス〉ム

クレムリン-きゅうでん【―宮殿】ソビエト連邦、モスクワの中心部にある宮殿。イワン三世により建設され、一七一三年ペテルブルグ遷都までロシア皇帝の居城。周囲を城壁に囲まれる。現在はソ連政府の諸機関がある。クレムリン。 発音クレムリンキューデン 〈豊〉チ

くれ-め-す【呉召】〔自サ四〕呉れる人を敬っていう語。下さる。*浄瑠璃-平家女護島-二「娘よ妹よ、とせろ、かくせろとぎやって、りんによがってくれめせかしと、ほろと泣たる可愛さ、都人のござんすより、りんによぎゃってくれめすが、身にしみわたると語らるる」 方言相手に物事を願い頼むことば。ください。〈くれめせ〉「貸してくれめせ」福岡県山門郡900〈くれめさろ〉上総003

クレメンス (Clemens) ギリシアの神学者。師パンタイノスのあとを継ぎ、アレクサンドリア教校を主宰。信仰を基礎とする知識(グノーシス)の成立を説く。主著は「ギリシア人への勧告」「ストロマテイス」など。(一五〇頃～二一五頃) 発音〈豊〉レ

クレメンス (Clemens) ローマ教皇の名の一つ。Ⅰ(五世) 第一九六代ローマ教皇(在位一三〇五～一四年)。フランス王フィリップ四世の圧力によって、居を アビニョンに移し、アビニョン捕囚の最初の教皇となる。(一二六四～一三一四) Ⅱ(七世) 第二二二代ローマ教皇(在位一五二三～三四年)。メディチ家出身。皇帝カール五世と抗争し、ローマを占領略奪される。のち、イギリス王ヘンリー八世とも争い、英国教会をローマ教会から分離させた。(一四七八～一五三四) Ⅲ(一一世) 第二四六代ローマ教皇(在位一七〇〇～二一年)。スペイン継承戦争に介入して、失敗。フランスのジャンセニスムを抑圧した。(一六四九～一七二一) Ⅳ(二四世) 第二五二代ローマ教皇(在位一七六九～七四年)。フランスの圧力によって、イエズス会を禁止した。(一七〇五～七四) 発音〈豊〉レ

クレメンティ (Muzio Clementi ムツィオ―) イタリアの作曲家、ピアニスト、教育家。近代的なピアノ演奏法を創始し、その門下から俊秀を輩出。ベートーベンにも多大な影響を与えた。(一七五二～一八三二) 発音〈豊〉ア 〈ス〉ム

クレモナ (Cremona)〔クレモーナ〕イタリア北部、ポー川沿岸の古都。一六～一八世紀、アマティ、ストラディバリ、ガルネリなど、バイオリン、チェロ製作の世界的名工を輩出したことで有名。また、クレモナで製作された名器を総称していうこともある。 発音〈豊〉ロ

クレモナ (Luigi Cremona ルイジ―) イタリアの数学者。射影幾何学の教科書著作によってイタリアの幾何学教育に大きな影響を与え、また三次曲面論、曲線変形論などの重要な研究を行なった。(一八三〇～一九〇三) 発音〈豊〉ロ

くれ-や 〔名〕遊郭をいう。盗人仲間の隠語。〔特殊語百科辞典〕

くれ-やす-い【暮易】〔形口〕文くれやす-し〔形ク〕日の暮れるのが早い。早く夕暮になる。〈季・冬〉*新勅撰-冬-四三四「くれやすき日かずも雪もひさにふるみむろの山の松の下折れ藤原道家」*俳諧-梅翁宗因発句集-冬「暮やすしこんな事なら百年も」*末枯〈久保田万太郎〉「暮れ易い日は、もう壁や障子の隅々に、深い、暗い、影を畳みかけた」 発音〈豊〉ク

ぐれ-やど〔名〕乞食などを泊まらせる下等な宿。木賃宿よりも更に下等なもの。ぐれ。*歌舞伎-四天王櫓礎-序幕「悪いを承知で引摺り込む、ぐれ宿(ヤド)の女あるし」*随筆-守貞漫稿-四「ぐれ宿は他国に云木賃宿の類にて、又異也。住居の背に一宇数戸の長屋を建て、一宇表口六尺奥行九尺出也。乞巧人を泊る也。一夜銭三十六文也。長屋には古畳をしき、土鍋一口を付すのみ。夜具及び他物を貸す。是を名付てぐれ宿と云」*歌舞伎-小袖曽我薊色縫(十六夜清心)-二幕「片輪者を買込んで鎌倉へ売る見世物師、地獄婆(ばば)アと名の高い、何でも引込むぐれ宿さ」 方言木賃宿。茨城県稲敷郡204 奈良県661 発音〈豊〉ロ ヤ

くれ-やみ【暗闇】〔名〕心がくらんで途方にくれること。くらやみ。*栄花-月の宴「宮はあはれにいみじと

思し召しながら、くれやみにて過ぐさせ給ふにも、昔の御有様恋しう悲しうて」

くれゆく【暮行】〔自カ四〕日や年が暮れて行く。また、ある期間が終わりになって行く。*万葉-一七・三八九五「玉はやす武庫の渡りに天づたふ日の久礼由気(クレユケ)は家をしぞ思ふ(作者未詳)」*後撰-哀傷・四二五「なき人の共にし帰る年ならばくれゆくのくれゆくも心ぼそく悲しきことかぎりなし」*平家-二・小教訓「暮行かげを見給ふにつけては、大納言の露の命、此の夕を限りなりと思ひやるにも」〔発音〕〈標ア〉[1]〈余ア〉[0]〔古辞書文明〕

クレヨン【名】(※crayon)《クレオン・クレイヨン》①洋画でデッサンに用いるコンテ、パステルなどの棒状の絵の具。*炎の人〈三好十郎〉五「気の無い風に膝の上のスケッチ・ブックにクレヨンを走らせている」②主に学童の図画用絵の具。顔料とパラフィン、木蠟などを混ぜて溶かし、棒状に固めたもの。*兄の立場〈川崎長太郎〉四「その中には、四月からはきっと手にしなくなる色とりどりのクレヨンがぶっくりふくらんで居た」*津軽の野づら〈深田久弥〉あすならう二人は他の子供に邪魔するから別にして、クレオンと手工材料を持たせて、好きなやうにさせておいた」*一点鐘〈三好達治〉家庭「帽子やランドセルや教科書やクレイヨンや」〔発音〈標ア〉[1]〈余ア〉[1]〕

ぐれり【副】(「と」を伴って用いることもある)①物の急に変わるさまを表わす語。*俳諧・山の井「しぐれは空さだめなく、はるると見れば、ぐれりと曇り」*雑俳・冬至梅「分別がぐれりと替る屠蘇ごころ」②不安定に揺れ動くさまを表わす語。ぐらり。*雑俳・蓬莱山「あちらへぐれりこちらへぐれり 手たらいに人形いれてあたまする」

ぐれり-ぐれり【副】(「ぐれり」の反復。多く「と」を伴って用いる)物が次々に変わってゆくさま、物が変わり動いて不安定なさまを表わす語。*俳諧・正章千句-五・五月雨「ぐれりぐれりと曇る嶺々」*浄瑠璃・松風村雨束帯鑑・龍神風流「蟹小舟ぐれりぐれりとかはり行く、男心は頼みなや」

ぐれり-ぐれん【副】その場その場に応じてうまく言いぬけるさまを表わす語。*歌謡・伊勢音頭二見真砂・客談議「善の綱から一筋に結ぶえにしを又しては、ぐれりぐれんと言ひぬけて」

ぐれり-っと【副】「ぐれり」に同じ。*雑俳・削かけ「ぐれりっと・又泣出したとら御ぜん」

く-れる【呉】〔他ラ下一〕〔文〕くる〈他ラ下二〕(一)人に物を与える。やる。①ある人が、話者または話者側の者に、物を与える。*書紀・神代上(水戸本訓)汝が持(も)たる八坂瓊の曲玉を予に授(クレ)よ」*神楽歌・杖(未)逢坂を今朝越えれば山人の我に久礼(クレ)たる山杖ぞこれ」*御伽草子・物くさ太郎「人の物をくれ候時は、何をもたぶる。くれ候はん時は、四五日も十日ばかりも、ただ空しく過ぎ候」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前・三・二「柳之助は火鉢の彼方(むかふ)に在る菓子を覗いて、『僕に一箇(ひとつ)与(クレ)たまへ』」②話者または話者以外の人が、他人または動植物に物を与える。受け手の身分や地位が与え手より低い場合、または、話者が受け手を軽蔑(けいべつ)している場合に用いることが多い。*嬉戯抄-三「犬なんどに物をくるると云は、やしなふ心也。下様の者に物を遣るを云也」*浄瑠璃・大経師昔暦-下「是式のめくさり銀、おのれふぜいにいつはりをいはふか。よいよいおのれにくれた」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前・三・二「其莨屋(たばこや)へ、五銭の白銅を出して、剰銭(つり)は与(クレ)て来た」*帽子〈国木田独歩〉「そんな帽子お前に呉(クレ)ては、欲けりゃ持ってゆけ」③染めつける。(二)補助動詞として用いる。多く動詞の連用形に接続助詞「て」を添えた形に付く。①話者または話者側の者に対してなされた他者の行為の下に付けて、その行為が好意的になされたり、こちらに利益や恩恵をもたらしたりするものであることを表わす。感謝や懇願の意を含むことが多い。*太平記-一八・金崎城落事「如何にもして杣山(そまやま)の城へ入進(いれまゐら)せてくれよ」*虎明本狂言・悪坊「おそうを同道した、一はんこしらへてくれさしめ」*咄本・無事志有意・大鼓「鼓の音が火の見の盤木の音にまちがふから止てくれろ」*人情本・春色梅児誉美-四・一九齣「どふか今日一日(いちんち)、延すやうにはなしちゃアくれられめへか」②話者または話者側の者に対した他者の行為の下に付けて、その行為が非好意的になされたり、こちらに不利益や損害をもたらしたりするものであることを表わす。*人情本・仮名文章娘節用-三・七回「こんなにわづらってくれちゃア、実にどうも困りきるぜ」③話者が他人に対してする行為の下に付けて、その行為が非好意的になされたり、相手に不利益や損害をもたらしたりするものであることを表わす。相手への敵意や、あなどり、あてつけの気持を伴う。やる。*虎明本狂言・髭櫓「ひげをむしりてくれんとてきっさきをそろへてかかりけり」*四河入海-八・三「にくさもにくし。画も石もこちへとりてくれうと云ぞ」*思出の記〈徳富蘆花〉一・八「すはと云ったら鎗押取って強盗の五人十人突伏せて呉れるなんて威張って」〔方言〕①自分に人に物を与える。やる。*「娘を嫁にくれる」「おれが教えてくれるから覚えておけ」山形県米沢043 福島県192 茨城県050 群馬県221 埼玉県秩父041 新潟県402 石川県石川郡454 山梨県508 静岡県富士郡・長野県・岐阜県吉城郡041 福岡907〈くるる〉福岡県900 長崎県926 肥後菊池郡195 熊本県天草島954 鹿児島県971 ②人を打つ。なぐる。福岡907 ③背中や尻(しり)などを人に向ける。「背中くれる」「尻くれる」新潟県西蒲原郡吉田416〔語源説〕(一)オクルの上略(俚言集覧)。(二)キクレルの反。要事をキク(聴)意から(名語記)。(三)クルメラルルの約(濁語考)。(四)古く、神や人への献上物を意味したクラという語から(古事記伝)。〔発音〈余ア〉〈標ア〉〈余ア〉[0]〈余ア〉[0]〈余ア〉[0]〈文〉「くる」〈標ア〉[0]〈余ア〉[0]〕

く-れる【暗・眩】〔自ラ下一〕〔文〕くる〈自ラ下二〕(暗くなるの意から)①(悲しみ、怒りなどの激しい感情のために)目の前がまっくらになる。目がくらむ。*落窪一「いかにしなし奉り給はんとするにかあらむと思ふに、目くるる心地して」*私聚百因縁集-二・八「朝夕此を見る毎に、身も切れ目も闇(クルル)心地して」*浄瑠璃・国性爺合戦-三「母は目もくれ身もつかれ、わっとばかりにどうどふし」②涙などで目がくもって見えなくなる。目がかすむ。多く、涙にくれる」の形で用いられる。*源氏-桐壺「雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生(あさぢふ)の宿」*平家-一〇・請文「涙にくれて筆のたてどもおぼえねども、心ざしをしるべにて、御文こまごまとかいて」*太平記-一八・春宮還御事「浦風に吹覆はれたる烟に目暮(クレ)て、防ぐべき様も無かりければ」*日葡辞書「ナミダニ メガ cururu(クルル)〈訳〉泣いてそのために眼が曇る。目が見えなくなる」③異常な条件のもとに置かれたために、理性的な判断を下すことができなくなる。④悲しみや、自己の能力をこえた事態のために理性を奪われ、いたずらに思い迷う。悲しみのために理性を失う。心がくらむ。思いまどう。→くれまどう。*保元-下・新院讃州に御遷幸の事「況(いはんや)是を限り、只今計りの御名残り、行末くれたる御心、せんかたなくぞ思し召す」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前・九「柳之助は途方に暮(クレ)たもんかと思案に暮れてゐたが」〔四〕(「目がくれる」の形で)欲望や利益のために心を奪われて、道理にはずれた判断を下す。欲や金のために目がくらむ。そのことだけを考えて、ほかのことは考慮に入れないでつき進む。*日葡辞書「タカラニ メガ cururu(クルル)〈訳〉財宝に盲目になる。すなわち、財宝だけに心をひかれて他の事は心に留めない」*浄瑠璃・吉野都女楠・三「鎧一領、太刀一ふりに目がくれて、そもや命が捨てられふか」④楽しみや希望がまったく奪われる。あじけなく灰色である。世の中が暗く、乱れる。→くれふたがる。*五代帝王物語-亀山「御点人々少々の外は参りよらねば、いとどかきくれてこそ思しあはれつらめ」〔発音〈標ア〉[0]〈余ア〉[0]〈標ア〉[0]〈今史〉江戸『くるる』●●●〈余ア〉[0]〔古辞書名義〕〔文〕「くる」〈標ア〉[0]〈今史〉江戸『くるる』●●●〈余ア〉[0]〔古辞書字鏡・色葉・名義・文明・饅頭〕

く-れる【暮】〔自ラ下一〕〔文〕くる〈自ラ下二〕①太陽が沈んであたりが暗くなる。昼が終わって夜になる。*万葉-四・四八五「昼は日の久流留(クルル)まで 夜は 夜の明くるきはみ久齊明天皇」*霊異記-上・七「日晩(クレ)、夜深(ふ)けて〈興福寺本訓釈 晩久礼〉」*新撰字鏡「暯 或作暮 於計邑計二反 去 除而風日暯亦翳也 言奄翳日光使不明也 无光也 太奈久礼利 又久留 又久毛利天加世不久」*伊勢物語-九「はや船に乗れ。日もくれぬ」*平家-三・足摺「日もくるれ共、あやしの臥どへ帰らず」〔方言〕①季節や年月などが終わりに近づく。時節が過ぎ去っていこうとする。*古今-秋下・三一二「ゆふづくよ小倉の山に鳴く鹿の声のうちにや秋はくるらん〈紀貫之〉」*源氏-賢木「年くれて岩井の水も氷とぢ見し人かげのあせも行くかな」*平家-一・逆櫓「春の草くれて、秋の風におどろき」③人生の終わりに近づく。老年になる。*霊異記-上・二八「所以(このゆゑ)に晩(クレ)れにし年四十余才を以て、更に巌窟に居り。〈興福寺本訓釈 晩久礼仁之〉」*興聖寺本大唐西域記巻十二平安中期点「歯老ここに至りて暮(クレ)ぬ」*徒然草-一一二「一生は、雑事の小節にさへられて、空しくくれなん」*菟玖波集-雑-五「けふ又聞きつ入相の鐘 身のうへにくるる齢と思はばや〈二条良基〉」〔語源説〕(一)クルル(暗)の義〈和訓栞・大言海〉。(二)カクレヌの反〈名語記〉。(三)クロアル(黒荒)の義〈日本語原学・林甕臣〉。〔発音〈余ア〉〈標ア〉[0]〈今史〉平安●○〈余ア〉[0]〈文〉「くる」〈標ア〉[0]〈今史〉平安●○〈余ア〉[0]〔古辞書字鏡・色葉・名義・文明・饅頭〕

ぐ-れる【自ラ下一】①予期した事が食い違う。見込みがはずれる。*毒薬の利(きい)たのか、但しは目算(もくさん)がぐれたのか」*和英語林集成(初版)「ヤクソクガ gureta(グレタ)」*断橋〈岩野泡鳴〉八「かう毎月ぐれる様では、それが為めに雇うて置く職工が動きませんで」②常軌を逸する。調子がはずれる。狂う。*俚言集覧「くれる グ濁。転倒するをグレルと云、繰より出たる詞也」*和英語林集成(初版)「キガ gureru(グレル)」*土心長塚節〈ア〉「おとつあは酩酊(よっぱら)ったってそんなに顛倒(グレ)なけりゃよかっべなあと独り呟いた」③生活態度が地道でなくなる。不良化する。*いさなとり〈幸田露伴〉五九「到底(とても)ぐれたる一生何(どう)なと為らば為れ」*別れた妻に送る手紙〈近松秋江〉「国で卒業して、東京に出てから、ぐれるといふこともあるかも知れぬが」*生活の探求〈島木健作〉四「あいつは、ぐれちゃったらしいんでね」④熟知している、精通していることをいう。てきや・盗人仲間の隠語。〔特殊語百科辞典〕⑤悪事が発覚することをいう。てきや・盗人仲間の隠語。〔特殊語百科辞典〕〔方言〕①乱れる。食い違う。長野県諏訪513 ②騒ぐ。あばれる。伊豆大島野増304 ③騒ぐ。動揺する。「村長の後任問

題で村がぐれている」高知県842 ④ふてくされる。すねる。青森県南津軽郡115 高知県幡多郡851 ⑤迷う。茨城県那珂郡201 ⑥怠ける。「ぐれ人足」長野県上田520 《ぐるる》大分県日田郡957 ⑦調子が狂う。「時計がぐれる」埼玉県入間郡宗岡248 〔語源説〕(1)マグレルの上略〔大言海〕。(2)クル〈繰〉から〔俚言集覧〕。(3)ハマグリ〈蛤〉を逆にしたグリハマという語をグレハマと訛り、それが動詞化されたもの。ハマグリは対でない他の貝と合わせると、くいちがうところから〔猫も杓子も=楳垣実〕。 発音〈全国〉グレー〔鳥取〕〈標ア〉〈標イ〉〈ア〉〈イ〉

くれろ【呉】〔連語〕方言相手に物事を求めることば。くれ。「湯をくれろ」「見てくれろ」岩手県東磐井郡137 仙台116 栃木県206 群馬県219 伊豆利島041 尾張158 佐賀県東松浦郡有浦・長崎県北松浦郡中野041 熊本県天草島954

クレロー（Alexis Claude Clairaut アレクシス＝クロード―）フランスの数学者、天文学者。微分方程式や天体力学に業績を残す。一八歳で学士院会員となった。主著「地球形状論」「月の理論」。（一七一三～六五） 発音〈標ア〉〈イ〉

くれわた・る【暮渡】〔自ラ四〕一面に暮れる。あたり一帯が暮れてゆく。＊新続古今・雑上「暮わたる峰の松原ほのぼのと木の間知られて月ぞいさよふ」藤原公綱〉 発音〈標ア〉〈イ〉

くれ・わり【塊割】〔名〕土のかたまりをくだく農具。棒の先に小さな板を斜めに打ち付けたもの。くれたたき。くれっち。つぶこわし。方言奈良県669 熊本県南関947 発音〈標ア〉〈イ〉〈ア〉

ぐ・れん【紅蓮】〔名〕①〈ぐれんげ（紅蓮華）①〉に同じ。＊五重塔〈幸田露伴〉二一「紅蓮（グレン）白蓮の香（にほひ）ゆかしく」②猛火の炎のたとえ。＊太平記一八・比叡山開闢事「紅蓮（グレン）の如くなる人の舌一つ、土の底に有て」＊浮世草子・当世芝居気質一四・二「女形を立役にて紅蓮（グレン）を入れ」③「ぐれんじごく（紅蓮地獄）」の略。＊愚迷発心集・寒風膚を徹（とほ）すれば、罪苦の氷を畏べし」＊義経記・五・吉野法師判官を追ひかけ奉る事「下を見れば三丈歴々とあるぐれんの淵、水上は遠し、雪しろ水に増りて」＊大観本謡曲・雷電・稲妻四方に閃（ひらめ）き渡って、内裏は紅蓮の闇の如く」 発音〈標ア〉〈イ〉〈ア〉〈イ〉

ぐれん 大紅蓮（だいぐれん）仏語。紅蓮地獄と大紅蓮地獄。八寒地獄の第七と第八。＊太平記一七・北国下向勢凍死事「彼の叫喚（けうくわん）大叫喚の声、耳に満ちて、紅蓮大紅蓮の苦み眼に遮る」＊謡曲・善知鳥「たとひ紅蓮大紅蓮なりとも、名号智火には消えぬべし」＊浄瑠璃・源平布引滝一「ぐれん大ぐれんの氷も炎と燃、浅間敷き死を遂（とげ）給はば」

ぐれん の 井戸掘（いどほ）り 紅蓮地獄で井戸を掘ること。寒苦の激しさをたとえたもの。＊浄瑠璃・大経師昔暦―暦歌「ぐれんの井戸ほり、せうねつの地ごくのかまぬりよしなや」

ぐれん・かえ・す：かへす【紅蓮反・群連反】〔他サ四〕見えなくなった物を、しきりにさがし求める。＊書言字考節用集・八「群連反 グレンカヘス 俚俗所言」＊雑俳・川柳評万句合―明和三・松二「上（うは）草り片片（かたかた）ぐれんかへすなり」＊雑俳・川傍柳・四「くれんかへしたと物さしひったくり〈季牛〉」＊和訓栞「ぐれんかへす 俗語也。紅蓮は地獄の名にて物を尋ね求むる事にいへり」 古辞書書言

ぐ・れんげ【紅蓮華・紅蓮花】〔名〕仏語。①真紅の蓮華。紅蓮。倶蘭茶華。＊大秘密王曼拏羅・三「又復観二想彼欲天一切荘厳一身如二紅蓮華色一、坐二紅蓮華一」②〈ぐれんじごく（紅蓮地獄）〉に同じ。＊大蔵法教・四五「七焚語波頭摩、或云二鉢特摩、華言二紅蓮華一、謂受二罪衆生由一寒苦増極、肉色大拆似二此華一也」

クレンザー〔名〕〔英 cleanser〕金属器、ガラスなどをみがく粉。みがき粉。 発音〈標ア〉〈イ〉 〈ア〉〈イ〉

ぐれん・じごく：ヂゴク【紅蓮地獄】〔名〕仏語。八寒地獄の第七、すなわち鉢特摩（梵 padma「紅蓮」と訳す）。ここに落ちた者は、寒さのために身体の皮、肉が破れて紅蓮華のようになるとされるところから、この名がある。ぐれん。ぐれんげ。＊今昔・六・三四「忞（ほしいまま）に僧の事を犯して、遂に死して紅蓮地獄に堕（おち）ぬ」＊源平盛衰記・一八・龍神守三種心事「身は紅色と成りて、紅蓮地獄の衆生の如し」 発音グレンジゴク〈標ア〉〈ア〉〈ア〉

クレンジング〔名〕〔英 cleansing〕「クレンジングクリーム」の略。 発音〈標ア〉〈イ〉

クレンジングクリーム〔名〕〔英 cleansing cream〕《クリンシンクリーム》化粧おとしに用いる油性クリーム。洗顔クリーム。クレンジン。＊秋のめざめ〈円地文子〉下段のひと「麻枝は寝たまま、ビニールの化粧バッグからクリンシンクリームを出して顔を拭きながら、下の声に耳を立てていた」 発音〈標ア〉〈イ〉〈ア〉〈イ〉

くれんそう：サウ【九連草】〔名〕植物「くりんそう（九輪草）」の異名。＊田舎教師〈田山花袋〉一七「校庭には九連草（クレンサウ）の赤いのが日に照されて咲いて居た」 発音〈標ア〉〈イ〉

ぐれんたい【愚連隊】〔名〕（「愚連隊」はあて字）繁華街をうろつき、暴行、ゆすり、たかりなどをする不良青少年の仲間。＊人間の壁〈石川達三〉上・いばらの道「巷には不良少年や愚連隊がばっこし」 語源説 グレル〈狂〉と連隊とが結び付いたもの〔大言海・すらんぐ＝暉峻康隆・猫も杓子も＝楳垣実〕。 発音〈標ア〉〈イ〉〈ア〉〈イ〉

くれんだげ【倶蘭茶華・倶蘭茶花】〔名〕「ぐれんげ（紅蓮華）①」に同じ。＊浄瑠璃・釈迦如来誕生会・二「何せんだら花（け）かひもなきあだの枕のおきふしを花もすいしてくれんだ花（ケ）」＊玄応音義・一「倶蘭吒花〈或云拘蘭茶花、此訳云二紅色花一也〉」

ぐれんちゃ〔名〕窃盗犯人をいう、盗人仲間の隠語。 隠語構成様式并其語集〕

グレンビル（George Grenville ジョージ―）イギリスの政治家。一七六三年、首相兼蔵相に就任。印紙条例を発してアメリカ植民地の大反対にあい、アメリカ独立の因となった。（一七一二～七〇） 発音〈標ア〉〈イ〉

くろ【畔・畦・墨】〔名〕①田と田の間の土を盛り上げた所。田の境。あぜ。＊岩淵本願経四分律平安初期点「世尊略〉中道にして有る田の善能く事を作して畦（クロ）・畔（あ）の齊整（ととのほれる）を見（みそこなはして」＊十巻本和名抄―一「畔 陸詞曰畔〈薄半反 和名久路 一云阿〈田界也」＊平家・九・越中前司最期「水田（みづた）のごゑ深かりけるくろの上に、二人の者共腰うちかけて息づき居たり」＊荘子抄―一「畛はさかい也田のくろぞ」②小高くなった所。また、物を小山のように積み上げたもの。＊観智院本名義抄「壘 ツカ ウネ クロ」＊名語記―五「たちあがりたるむらむらをくろといへば」＊歌謡・田植草紙―晩歌「一番「をきの田中のくろはなにくろか けふの田主のとくのまいくろよ」＊和訓栞「くろ〈略〉四国辺に物を多く積累ねたるをいふ木ぐろ藁ぐろ栗ぐろ稗ぐろなどいふめり墨の字の意なるべし」＊せみと蓮の花〈岸田譲治〉「そばの畑に大きな藁のくろがあった」 補注方言にさまざまな意味の広がりがあり、「くろ」「ぐろ」両形が見られる。別項の「ぐろ（墨）」も同語源かと思われるが、はっきりしない。 方言①田の限られている道や山などの斜面。新潟県中蒲原郡411 ②田の隅やまわりの耕し残されている部分。奈良田510 ④水田のあぜ。岩手県紫波郡126 茨城県真壁郡203 群馬県勢多郡221 埼玉県入間郡246 千葉県060 ⑤田や畑のあぜ。長野県上伊那郡530 熊本県上益城郡938 大分県956 ⑥物の隅で。福井県遠敷郡459 ⑦物のはじの方。すみ。山梨県502 岐阜535 静岡県563 愛知県569 三重県三重郡050 熊本県南関947 ⑧物のかたわら。そば。茨城県稲敷郡201 岐阜県郡上郡541 愛知県北設楽郡014 《ぐろ》岐阜県吉城郡538 大分956 ⑨わらなどを山のように積んだところ。淡路島660 四国704 徳島県祖谷809 愛媛県827 高知県842 《ぐろ》島根県鹿足郡蔵木724 山口県772 香川県818 愛媛県834 高知県841 ⑩石などを積んであるところ。《ぐろ》島根県鹿足郡724 山口県771 ⑪育てた芝生を土ごと切り取ったもの。青森県三戸郡118 語源説(1)クルクル〈旋回〉とめぐる義。クルワ〈回輪〉の意。朝鮮語クロング〔大言海〕。(2)クレ〈転〉の意〔和訓栞〕。(3)クレの転。クレマハル意〔名言通〕。(4)コロ〈小路〉の転〔和語私臆鈔〕。(5)フロの転。神迎えのためにフロを設ける所の意〔万葉集叢攷・高崎正秀〕。(6)カクレヨの反〔名語記〕。 発音〈全国〉グレ。クナ・クレ・クロ〈岩手〉クル〈岩手・秋田・岐阜〉グル〈紀州〉フル〈山形〉〈標ア〉〈ア〉〈ア〉〈イ〉〈ア〉〈イ〉〈ア〉〈イ

などを用いるが、白抜きの「上」「吉」などに対して、黒の「上」「吉」などを用いて、白抜きより上位を表わす。できばえがこの上もなくよいことを表わす語。黒上上吉。＊随筆・劇場一観顕微鏡一下帙・上・親仁形花車形之説「此両役も古代は名人ありて、既に中古沢村源次郎などは花車形にて黒(クロ)の上上吉に至りし也」

くろ【竈】〔名〕昆虫「こおろぎ(蟋蟀)」の異名。＊物類称呼二「竈馬 いとどゝ略ゝ近江にて、くろと云 これ古 こほろぎといひし物也」 方言①煮たきする設備。かまど。三重県度会郡610 香川県610 ②昆虫、こおろぎ。香川県610

くろ〔名〕盗人仲間の隠語。①手袋をいう。〔特殊語百科辞典〕 ②銅貨をいう。〔隠語輯覧〕 ③ほくろをいう。〔隠語構成様式并其語集〕

くろ【呉】〔動〕方言①相手に物事を求めることば。「おれに一つくろ」「あっちへ行ってくろ」山形県南置賜郡・福島県河沼郡041 茨城県050 栃木県211 群馬県群馬郡225 千葉県印旛郡261 神奈川県282 長野518 岐阜県郡上郡541 愛知県中島郡584 〈くろう〉福島県相馬174 伊豆大島304 岐阜県益田郡539 ②相手に物を与えることば。あげよう。やろう。三重県度会郡610

ぐろ【壥】〔名〕(くろ(畔)の変化した語か) 小高くなっている草むら。草木のこんもり茂っているところ。＊浮世草子・好色一代男―四・二「荆(うばら)・山梔(くちなし)のぐろのもとにふして」＊一目玉鉾―三「川の西の畔(グロ)の中に」 方言①いばらや雑草などの茂った草むら。和歌山県伊都郡044 大阪府南河内郡642 島根県邑智郡粕淵712 岡山県苫田郡731 鳥取県八頭郡016 ②物の集まり。「人がぐろになっちょる」山口県柳井771 愛媛県宇和島839 高知847 ③人家の集落。部落。山口県豊浦郡769

ぐーろ【愚魯】〔名〕(形動) おろかなこと。ばか。愚鈍。＊本朝文粋―一〇・古廟春方暮詩序〈大江以言〉「以言性是愚魯。雖一慙烏雲之嘲」＊明衡往来―下本「納言昇首之所、愚魯当仁、其故如何」＊撰択本願念仏集「上古賢哲猶以如此。末代愚魯寧不遵之哉」＊蘇轍―東方書生行「東方書生多愚魯、閉門誦書口生」＊土居晶馬林・書言

グロ〔名〕(形動)(「グロテスク」の略) グロテスクなさま。また、その物や人。＊見知ら人〈真船豊〉一「いえ、あのお父さんの肖像よ…見れば見るほど、お父さんのグロの特徴が出てるんだもの」＊闘犬図〈石坂洋次郎〉「わが顔は無事なれと念うが他人の顔となると少し位グロなのを喜ぶ心理がない訳でもない」 発音〈倉〉〔名〕〈奈〉〔名〕

グロ(Antoine Jean Gros アントワーヌ=ジャン=)フランスの歴史画家。戦争画を多く描く。代表作は「ヤッファのペスト患者」「バンテオンの天井画」など。(一七七一～一八三五) 発音〈倉〉〔名〕

くろーあい〔名〕方言魚。①めじな(目仁奈)。島根県浜田028 ②あいなめ(鮎並)。あぶらめ。兵庫県美方郡諸寄028

くろーあえ…あへ(黒和・黒韲)〔名〕①黒ゴマであえること。また、黒ゴマごまのすったものであえた食べ物。 ②イカをその墨と塩とであえたもの。黒作り。＊咄本・醒睡笑―三「烏賊(いか)をくろあへにしてたまはる処へ、ふと人来れり」 発音〈倉〉〔名〕〔ア〕

くろーあか・い【黒赤】〔形口〕黒みを帯びた赤色であるさま。＊西洋道中膝栗毛〈仮名垣魯文〉八・上「くちばしはからす天狗のごとく色くろあかくながき手をのべ」＊草枕〈夏目漱石〉一二「草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして」 発音〈倉〉〔名〕〔カ〕

くろーあけ【深緋・黒緋】〔名〕緋(あけ)の色を濃く染めて黒ずんだもの。黒ずんだ緋色。また、その色の袍(ほう)。＊尾張本今鏡―腹々の御子「ただ人の四位と王の五位とはくろあけを着、ただ人の五位あけの衣にてうるわしくはあるべきを」

くろーあげは【黒鳳蝶・黒揚羽蝶】〔名〕アゲハチョウ科の大形のチョウ。はねの開張一〇～一二センチメートル。はね、体ともに黒く、ふつう後ばねには尾状突起があり、後縁に赤紋が並ぶ。雌は後ばねの前が白く、雌は前ばねの地色がやや淡く、後ばねの赤紋がよく発達する。幼虫は緑色の地に褐色の横帯がある。本州以南の各地、中国、インドなどに分布。くろちょう。＊改正増補和英語林集成〈Kuro gewa クロアゲワ〉＊五百句〈高浜虚子〉昭和九年「黒揚羽花魁草にかけり来る」 発音クロアゲハ〈倉〉〔ア〕

くろーあざ【黒痣】〔名〕①皮膚の色素が増殖してできる黒い斑点。表面は、平らなもの、いぼ状、毛のはえたものなどがある。多くは生まれつきか、生後間もなくできる。色素性母斑。 ②打撲などのために皮下に内出血が起こり、青黒く見えるもの。＊細君〈坪内逍遙〉一「左の腕の黒痣(クロアザ)の天然(うまれつき)ならぬを見るものは」＊其面影〈二葉亭四迷〉三八「今打たれた跡が腫脹(うだば)れて黒痣になってゐる」 発音〈倉〉〔ア〕

くろあし・あほうどり…アハウどり【黒脚信天翁】〔名〕アホウドリ科の鳥。全長約八〇センチメートル。翼の開張一・八メートル。体重約三キログラムに達する。羽色は黒褐色。顔と腰に白色があり、くちばしと脚は黒色。魚、イカなどを主食とする。北太平洋に広く分布し、日本近海の沖でも見られる。 発音クロアシアホードリ〈倉〉〔名〕

くろーあしげ【黒葦毛】〔名〕馬の毛色の名。黒みを帯びた葦毛。＊明月記―正治二年一一月二七日「一疋黒葦毛〈八見兼所、進〉」＊随筆・卯花園漫録―二「黒蘆毛、惣身黒く所々白き毛交りたるなり」 発音クロアシゲ〈倉〉〔ア〕

くろーあずき…あづき【黒小豆】〔名〕アズキの栽培品種。実が黒く普通のアズキより小さい。＊重訂本草綱目啓蒙―二〇・穀「赤小豆〈略〉又小にして深黒色なるをくろあづきと云。一名ししくわず味良ならず」 発音〈倉〉〔ア〕

くろーあせ【黒汗】〔名〕からだが黒くよごれるのもかまわず働いて流す汗。よごれのために黒ずんだ汗。＊火の柱〈木下尚江〉二・一「私ゃ工場で黒汗流がし、主(ぬし)は留守番、子守歌」 発音〈倉〉〔ア〕

クロアチア(英Croatia)ユーゴスラビア連邦を構成する共和国の一つ。連邦の北西部を占める。首都ザグレブ。一二世紀以来ハンガリー、トルコ、オーストリアが支配。第一次世界大戦後セルブ=クロアートースロベーン王国を形成。一九四五年連邦に加入。石炭など豊富な鉱産資源と水力発電を基礎とした工業が主。 発音〈倉〉〔ア〕

クロアッサン〔名〕⇩クロワッサン

クロアード=フー(仏Croix de Feu「火の十字架」の意)フランスの右翼団体。陸軍参謀将校ド=ラ=ロック伯が第一次世界大戦に十字勲章を得た在郷軍人を組織して創設。一九三六年人民戦線政府により解散を命ぜられた。 発音〈倉〉〔ア〕

くろーあなぢ【黒穴蜂】〔名〕ジガバチ科のハチ。体長約三センチメートル。全身黒色で顔などに銀白色の短毛がある。はねは褐色で透明。もっとも普通に見られるアナバチで、砂地に深さ一メートルにも及ぶ穴を掘る。巣にはウマオイムシ、ツユムシなどを幼虫のえさとして麻痺させてたくわえる。日本各地のほか、世界に広く分布する。 発音〈倉〉〔ア〕

くろーあばた【黒痘痕】〔名〕黒っぽく跡のついたあばた。くろいも。＊思出の記〈徳富蘆花〉一・四「名は重(ちう)と云って顔一面の黒痘痕(クロアバタ)」＊歌行燈〈泉鏡花〉一四「然も一面、念入(ねんいり)の黒痘痕(クロアバタ)だ」 発音〈倉〉〔ア〕

くろーあぶら【黒油】〔名〕黒色の鬢付油(びんつけあぶら)。白髪(しらが)染めに使う油。＊雑俳・宝鼓評万句合―二「黒油とろりと老の女郎買」＊滑稽本・浮世風呂―三・上「黒油(クロアブラ)で、はげってうを隠してさ」＊安愚楽鍋〈仮名垣魯文〉三・下「くろ油でしらがをかくすばあさねもりなりのこしらへ」 発音〈倉〉〔ア〕

くろーあや【黒綾】〔名〕綾織りの黒い布地。＊多情多恨〈尾崎紅葉〉前・三「黒綾のモーニングに藍気鼠の綾の窄袴(づぼん)」＊思出の記〈徳富蘆花〉八・七「黒綾のモーニングを着た大の男が莞爾(にこ)々々笑って立って居る」 発音〈倉〉〔ア〕

くろあや・ラシャ【黒綾羅紗】〔名〕(ラシャは羅紗raxa)黒い綾織りのラシャの布地。＊暗夜行路〈志賀直哉〉二・五「二十年も前に出来た黒綾羅紗(クロアヤラシャ)の二重廻、鼻緒のゆるんだ安下駄、太巻の洋傘(かうもり)」 発音〈倉〉〔ア〕

くろーあり【黒蟻】〔名〕膜翅(まくし)目アリ科に属する昆虫のうち、体が黒色から黒褐色の種類の俗称。クロオオアリ、クロヤマアリ、トビイロケアリなどがある。＊重訂本草綱目啓蒙―三六・卵生「蟻 あり〈略〉又黒色の蟻数品あり〈略〉皆くろありなり」 発音〈倉〉〔ア〕〔ロ〕

くろーあわ…あは【黒粟】〔名〕アワの品種。穂の色が黒色のもの。 発音〈倉〉〔ア〕

くろーあん【黒餡】〔名〕色の黒い餡。材料の豆に黒砂糖を加えて作ったものが多い。＊竹沢先生と云ふ人〈長与善郎〉竹沢先生と赤い月・二「皿に盛った黒餡の羊羹を持ってきた奥さんは」 発音〈倉〉〔ア〕

くろ・い【黒】〔形口〕文くろ・し【形ク】①黒の色をしている。墨の色である。＊古事記―上・歌謡「ぬばたまの久路岐(クロキ)御衣(みけし)をま具(つぶさ)に取り装(よそひ)」＊万葉―九・一七四〇「若かりし膚(はだ)も皺(しわ)みぬ 黒有(くろかり)し髪も白(しら)けぬ〈虫麻呂歌集〉」＊源氏―須磨「うちなびき給ひて、涙(なみだ)こぼるるを、かきはらひ給へる御手(て)つき、くろき御数珠(ずず)に映(は)え給(たま)へる」 ②濃い紫、にびいろなどの黒っぽく暗い感じのする色である。＊宇津保―楼上上「御手の綾の単衣のくろきよりさしいで給へる、いと美しげにおはす」＊源氏―椎本「くろき紙に、夜の墨つぎもたどたどしければ」＊大鏡―五・道長上「うへの御ぞはくろきに、御ひとへぎぬはくれなゐのはなやかなるあはひに、ゆきのいろにもてはやされて」 ③膚が日に焼けている色である。＊古今著聞集―五・一七一「都にありながら、此歌をいださむ事念なしと思て、人にもしられず久しく籠り居て、色をくろく日にあたりなして後」 ④きたない。よごれている。＊徒然草―一七五「年老いたる法師召し出されて、くろくきたなき身を肩抜ぎて、目もあてられずすりたるを」＊真空地帯―野間宏〈六・五「そこからでてきたものは、黒い手垢のついたぼろぼろになった手紙と」 ⑤悪心があって公明でない。悪い。腹黒い。＊宇津保―祭の使「昨日今日入学して、くろしあかしのさとりなきが、ぞくうたいまつるを」 ⑥その道に老練である。くろうとである。＊浄瑠璃・奥州安達原―一「お前方は素人(しろうと)、慮外なから文学の友三というて、ずんと黒い男」＊滑稽本・浮世床―初上「此野郎ナ、大道売の砂糖漬を常住なめつけて居やァがるから、言語は黒いもんだ」＊雑俳・柳多留―一〇七「声色も翁に黒い奴が出る」 ⑦粋(いき)である。＊浄瑠璃・太平記菊水之巻―三「大黒の文字は大きに黒い、おれを粋ぢゃといふ心、趣向どふもいへぬ」 ⑧きげんがよい。こころよい。＊洒落本・男信新宗玄々経「おれをたいせつに心へばこそ、此うまき物をわけたりと悦び、二度ながら黒う出て済められしに」 ⑨犯罪の疑いが濃厚である。＊人情本・恋の花染―初・三「二人一緒に縄縛(から)げ、知県所(だいくゎんしょ)へ引き摺り出

し、白いか黒いか分けやせう」 ⑩「くろきち(黒吉)①」の位である。*洒落本・辰巳之園「黒ひ 役者評判記より出たり。吉の事也」 [語源説](1)クラシ(昏)と通じる(和句解・和訓栞)。(2)クレシキ(暮如)の義(名言通)。(3)クレイロシ(暮色如)の義(日本語原学=林甕臣)。 [発音くまろ]クーレー[南伊勢]クーロイ[南伊勢・和歌山県]クホイ[山形]クレ[岩手・秋田・千葉・鳥取・島根]クレァ[津・軽語集]クンロイ[静岡] [會ノ]回 [奈ノ][ク] [文]「くろし」 [會ノ][ク] [今史]平安○○㊐ 江戸「くろき」●○○ [奈ノ]回 [古辞書色葉・名義・和玉文明・明応・天正・観・黒本・易林・書言]

くろい 風(かぜ) (黒風(こくふう)の訓読み) 強く吹く風。大風。*今昔・六・六「忽に黒き風四方より来(きた)りて諸(もろもろ)の木を折り、河の流れ浪高くして船漂ふ」*多情多恨〈尾崎紅葉〉前・二「時雨は蕭々(しょぼしょぼ)と、黒い風の隙洩るにつれて、身顫の出るほど寂寥は外から逼って来る」

くろい 狐(きつね) (一)(髪が黒いとこから)女郎の異称。*雑俳・柳多留一一六「息子のきょろう黒い狐で直り」 (二)江戸新吉原にあった九郎助稲荷の異称。*雑俳・川傍柳一一「仕合さ黒い狐へいとま乞」

くろい 屎(ばば) 新生児の初排便をいう。胎便。かにばば。かにくそ。*雑俳・机の塵「さっぱりと・お六が黒い屎をたれ」

くろい 目(め) 確かな眼力。しっかりした観察眼。*浄瑠璃・本朝二十四孝一「賤の方の心底黒い眼で見抜いて置いた」*あらくれ〈徳田秋声〉二五「だから言はんこっちゃない。稚(ちひさ)い時分から私が黒い目でちゃんと睨んでおいたんだ」

くろう 出る 粋(いき)にさばく。粋人らしくふるまう。*洒落本・男倡新宗玄々経「一度ながら黒う出て済められしに」

くろき 衣(きぬ) ①「くろぎぬ(黒衣)①」に同じ。*源氏・賢木「髪は、それよりも短かくて、くろききぬなどを着て、夜居(よゐ)の僧のやうに、なり侍らむとすれば」 ②「くろぎぬ(黒衣)②」に同じ。*枕一一九「あはれなるもの。男も、女も、わかくきよげなるが、いとくろききぬを着たるこそあはれなれ」

くろき 黍(きみ) 「くろきび(黒黍)」に同じ。*二十巻本和名抄一七「秬黍 本草云秬黍一名黒黍〈秬音巨和名久呂木久美〉」 [補注]十巻本和名抄一九には、「久呂岐比(クロキヒ)」とある。 [古辞書和名]

くろき 車(くるま) 「くろむしろのくるま(黒筵車)」に同じ。*源氏・賢木「くろき御車の内して、藤の御袂に、やつれ給へれば、殊に見え給はねど、ほのかなる御有様を、世になく思きこゆべかめり」

くろき 人(ひと) (四位以上の官人は黒色の袍(ほう)を着たところから)四位以上の人。*蜻蛉一下・天延二年「かれがいできつる車のもとには、あかき人、くろき人、おしこりて、かずもしらぬほどにたてりけり」

くろき 装(よそい) 黒色の衣服を着たよそおい。特に、喪服を身にまとうこと。*源氏・薄雲「つねよりもくろき御よそひにやつし給へる御かたち、たがふ所なし」

くろ-いお【黒魚】[名] [方言]魚。①めじな(目仁奈)。紀伊熊野九木浦108 対馬933 ②すずめだい(雀鯛)。土佐高岡郡須崎108

くろ-いかずち ：いかづち【黒雷】上代神話で、伊邪那美命が、死後、腹(古事記)または尻(日本書紀)に宿したという雷神。*古事記・上「頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷〈くろいかづち〉居り」*書紀・神代上(水戸本訓)「謂(い)ふ所の八雷(やくさのいかつち)は、首に在るをば大雷(をほいかつち)と曰ふ〈略〉尻(かくれ)に在るをば黒雷(クロいかづち)と曰ふ」 [発音會ノ]イ

くろ-いし【黒石】[名] ①色の黒い石。色の黒い岩。*新撰六帖一六「秋風に軒端の椎の落ちつれば庭にくろ石しくかとぞ見る〈藤原光俊〉」 ②黒の碁石(こいし)。先手が持つ石。くろ。*雑俳・柳多留一一七「おやにもあほず黒石をいかすも」*吾輩は猫である〈夏目漱石〉一一「盤の上を白石と黒石が自由自在に飛び交はして居たが」 [発音會ノ]回

くろ-いし【黒石】青森県中部にある地名。江戸時代は津軽支藩一万石の城下町。リンゴ、米などを生産。黒石温泉郷がある。昭和二九年(一九五四)市制。 [発音會ノ]回

くろ-いし-おんせんきょう ：ヨンセンキャウ【黒石温泉郷】青森県黒石市、浅瀬石川の渓谷に沿う温泉郷。温湯(ぬるゆ)、板留、青荷などの温泉から成る。泉質は弱食塩泉、セッコウ泉。西十和田温泉郷。 [発音クロイシオンセンキョー ●會ノ]回

くろ-いし-はだかまつり【黒石裸祭】[名] 岩手県水沢市黒石町にある黒石寺薬師堂で除暦正月七日に行なう祭礼。若者が裸で水垢離(みずごり)をとり、夜の一〇時ごろ、境内の隅に積み上げた柴燈木(さいとうぎ)に登って火をつけ、蘇民歌をうたって踊る。八日の午前二時ごろ、ほら貝の音で別当を迎え、薬師堂で蘇民袋を前にして読経があり、青、黄の鬼の面をつけた童子の所作のあった後、信徒は東西二組に分かれ、裸のまま押し合って蘇民袋を奪い合う。これを得た組の方角が、その年の豊作といわれる。《季・新年》

くろいそ【黒磯】栃木県北東部にある地名。東北本線が通じ、那須温泉郷への入り口にあたる。昭和四五年(一九七〇)市制。 [発音會ノ]回

クロイソス(Kroisos) リディア王国の最後の王(在位BC五六〇頃～五四六年)。小アジアのギリシア都市を征服。ペルシアのキュロス王と戦って敗れ、リディア王国は滅亡。クリーサス。BC五四六年没。

くろ-いた【黒板】[名] ①黒く塗った板。 ②銅、鉄板で、焼きなましたままで酸洗滌を施していないもの。 [發音會ノ]回

くろいた-かつみ【黒板勝美】歴史学者。文博。号、虚心。長崎県出身。東京帝国大学卒。経済雑誌社に入社、「国史大系」「群書類従」の校訂、出版に従う。のち東京帝大教授となり、古文書学を確立。日本におけるエスペラント語の開拓者でもある。著に「国史の研究」「欧米文明記」など。明治七～昭和二二年(一八七四～一九四六)

くろ-いたち【黒鼬鼠】[名] 冬毛の赤褐色が特に濃いイタチ。また、その毛皮。 [発音會ノ]イ

くろ-いたべい【黒板塀】[名] 黒く塗った、板づくりの塀。黒渋塗りの板塀。黒塀。*雑俳・柳多留一一二九「黒板塀へ初雪の吹絵形」*当世書生気質〈坪内逍遙〉一八「見越の松に黒板塀(クロイタベイ)とは、すつかり御注文とできて居るね」 [発音クロイタベイ ●會ノ]イ [タ] [奈ノ]イ

くろ-いちご【黒苺】[名] バラ科の落葉低木。北海道、本州、四国の山地に生える。ナワシロイチゴに似ているが、小葉の先端がとがり、果実が熟すと黒紫色になる。 [発音クロイチゴ ●會ノ]イ

くろ-いちもんじ【黒一文字】[名] 紋所の名。黒く一文字を書いた図柄のもの。*浄瑠璃・曽我五人兄弟一紋尽し「白一文字・くろ一もんじ、山の内のもん所」 [発音會ノ]モ

クロイツァー(Leonid Kreutzer レオニード―) ドイツの音楽家、ピアニスト。ベルリン高等音楽学校教授ののち、昭和一〇年(一九三五)から日本に永住して東京音楽学校教授となり、ピアニスト、指揮者として活躍、多くの門下を育成した。(一八八四～一九五三) [発音會ノ]ツ

クロイツェルソナタ (一)(注語ドKreutzer+イタSonata) 室内楽曲。ベートーベン作曲。バイオリン―ソナタ第九番、イ長調、作品四七。一八〇三年作。バイオリン奏者クロイツェルに献呈され、ベートーベンの室内楽曲中の代表作の一つ。 (二)(原題ロシKrjejc'jerovaSonata) 中編小説。レフ=トルストイ作。一八九〇年発表。家庭に出入りして妻とクロイツェルソナタを合奏するバイオリン弾きに対する夫の嫉妬を深刻に描いた。 [発音會ノ]ン

くろ-いと【黒糸】[名] ①黒色の糸。黒く染めた糸。*真空地帯「野間宏」七八「しかもその襦袢にはすでに黒糸でキタニと名前がぬいこんであり」 ②「くろいと(黒糸威)」の略。*太平記一九・六波羅攻事「年の程五十許(ばかり)の、ねばの黒糸(クロイト)の鎧(よろひ)に、五枚甲の緒を縮(しめ)て」*相国寺供養記「松田孫左衛門尉秀久 黒糸鶴毛」 [発音會ノ]回 [奈ノ]回

くろ-いと-おどし ：をどし【黒糸威・黒糸縅】[名] 鎧(よろい)の威の一種。黒色の糸でおどしたもの。黒糸。*吾妻鏡・文治五年九月七日「着=黒糸威甲、駕=鹿毛馬=者。先取=予引落」*金刀比羅本保元上・官軍方々手分けの事「白青の狩衣に黒糸縅のうたりけるの鎧きて、黒馬に黒鞍をきてそのったりける」 [発音會ノ]ブ [今史]江戸●●●●○○○ [奈ノ]ブ [古辞書易林]

くろいと-かたからくれない ：かたからくれなる【黒糸片唐紅】[名] 鎧(よろい)の威の一種。全体を黒糸で、肩の部分二段を唐紅(からくれない)でおどしたもの。*甲組類鑑「黒糸偏韓紅威 クロイトカタカラクレナキのおどし」

くろいと-かたしろいと【黒糸片白糸】[名] 鎧(よろい)の威の一種。全体を黒糸で、肩の上二段だけを白糸でおどしたもの。

くろ-いぬ【黒犬】[名] 毛の黒い犬。*咄本・醒睡笑一「黒犬の大いなる出て、したたかに臑(すね)を喰ひけり」*雑俳・柳多留一初「黒犬を挑灯にする雪のみち」 [発音會ノ]ブ

くろいぬ に 噛(か)**まれて灰汁**(あく)**の垂**(た)**れ涯**(かす)**に怖**(お)**じる** (一度黒犬に食いつかれると、以後は灰汁がこぼれていても、それを見ると犬かと思ってこわがるという意から)ひどい目にあうと、似たものはすべてこわく思うようになることのたとえ。*俳諧・毛吹草一二「くろいぬにくはれてあくのたれかすにおづる」*浮世草子・忠義太平記大全・三・大岸由良之助約盟をかたむる事「これぞ世のことわざにいふ、黒いぬにくはれしものはあくのたれかすにおづるとやらん」*諺苑「黒狗(クロイヌ)に嚙(クワレテ)灰汁(アク)のたれかすにをじる。黒犬にくはれて赤犬にもおそるとも云。又赤犬のたれかすとも云」

くろいぬ の-お尻(いど)=尻(けつ)「尾も白うない」に「面白うない」をかけたことば。*すい言葉廓流行「黒犬のおどで、おもしろうない」*新撰粋言葉集「黒犬のおいどで、尾もしろうない」

くろ-いも【黒痘痕】[名] 「くろあばた(黒痘痕)」に同じ。*随筆・異説まちまち一二「稲葉美濃殿は大男にて黒いもあり」

くろいわ くろいは【黒岩】姓氏の一つ。 [発音會ノ]回

くろいわ-るいこう【黒岩涙香】翻訳家、新聞記者。本名周六。高知県出身。慶応義塾中退。「万(よろず)朝報」を創刊、主筆となる。創作味を加えた翻訳小説を紙上に連載。翻訳小説「噫(ああ)無情!!」レ=ミゼラブル」「巌窟王」「ふくろう」=モンテクリスト伯」、論文「天人論」「人生問題」など。文久二～大正九年(一八六二～一九二〇)

くろ-インク【黒―】[名] (インクは英ink)(くろいキ)黒色のインク。青インクなどと違ってインク消しでは消えないので証券用にはこれを用いる。*病

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com